

42185

教科書文庫

4
810
42-1923
200030 2220

Kodak Gray Scale



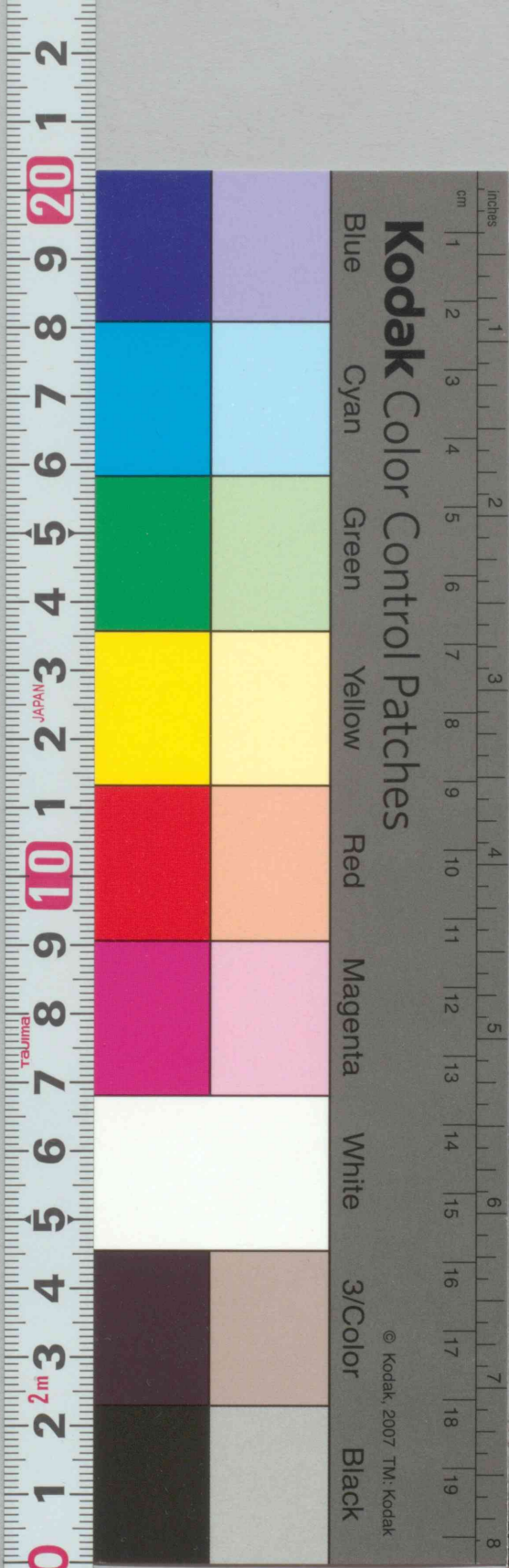
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



教科書文庫  
4  
810  
42-1923  
2000302220

女子新國文 卷八

高女三

石塚福枝



教科書文庫  
4  
810  
42-1923  
2000302220



(谷長倉鎌) 佛 大

資料室

370.9  
Ha7

濟定檢省部文

用科語國校學女等高 日四十二月二十年二十正大



女子新國文

文學博士 芳賀矢一編

東京 合資會社 富山房發兌



女子新國文 卷八

目次

一	大嘗祭	一
二	平安京	六
三	衣笠山(自修文)	三
四	百蟲譜	一五
五	落花の雪	一八
六	櫻井の驛	二四
七	人臣の道	二八

目次

広島大学図書

2000302220



八 妹に諭す……………三三

九 簡易生活(自修文)……………三九

一〇 奥の細道その一……………四五

一一 奥の細道その二……………四九

一二 川柳點……………五四

一三 銀の猫……………五八

一四 長谷寺詣……………六六

一五 方丈の室……………七三

一六 孔子の故郷……………七六

一七 羽衣—謠曲……………七九

一八 小謠……………八六

一九 今様三題……………八八

二〇 鶴の國……………八八

二一 野村望東尼……………九五

二二 女を詠める歌……………一〇〇

二三 色 彩……………一〇一

二四 簍蟲と蜘蛛(自修文)……………一〇六

二五 我が國の文化その一……………一一六

二六 我が國の文化その二……………一二三

二七 佛像彫刻……………一二五

二八 名 數……………一二三

二九 主従の別……………一三四

目次終

一	曉の誕生	一三九
二	文化生活の出発點	一四二
三	文化と婦人(自修文)	一四六
四	春と人	一五三
五	當今の憂	一五九



# 女子新國文 卷八

## 一 大嘗祭

大正四年十一月。仙洞御所朝集所

十日の即位禮から引續いての好天氣、大禮日和といふ語さへ出來た。十四日の夕方から仙洞御所内の朝集所へ參集。世界に類のない森嚴な大嘗祭は、夜を徹して行はれるのである。控所は幾室にも分れて、眩いほどの電燈の光、一々呼上げる官氏名の順序によつて、左右二列に分れて、大嘗宮南板垣門内の幄舎に着席する。電燈を籠めた數箇の燈籠がほんのりと明る。大嘗宮の柴垣が微に認められるだけである。火焚屋に燃える庭燎は、時に明るく、時に暗い。一同の着席が済むと、薄明るい燈籠の火も消されて、ぬばたまの闇の夜

庭燎 幄舎

である。

一聲長い笛の音が樂舎から起つて、稻春歌が高らかに吟ぜられる。徐に嚴な調子で、神々しさが身にしむやうである。稻春歌が終つて、稍しばしのほどを経て、再び歌聲が起る。今しも國栖の國風が奏せられるのであらう。つゞいて風俗歌が歌はれる。大禮使の官人が起立着席を呼ぶごとに、或は起立し、或は着座する。闇に包まれた千餘人の參列員は、端坐凝念して、身はさながら神代の昔に返つた心地である。今は掌典長の祝詞が濟み、廻立殿からの渡御もあつたのであらうと、御祭の次第を想



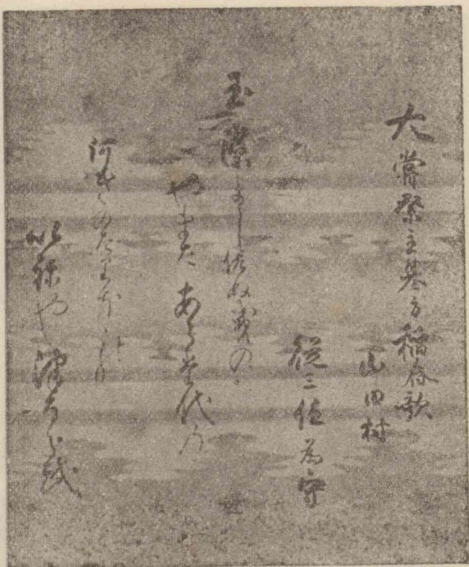
黒田清綱詠並びに筆

大嘗祭悠紀  
方稻春歌  
六美村  
正二位  
源清綱  
八束穂のた  
りほのいね  
をかりつみ  
てつくや村  
人むつみあ  
ひつゝ  
國風

廻立殿

大嘗祭主基  
方稻春歌  
山田村  
從三位  
爲守  
玉藻よしさ  
ぬきのやま  
だあらた代  
の秋のたり  
ほの稻やつ  
くらん

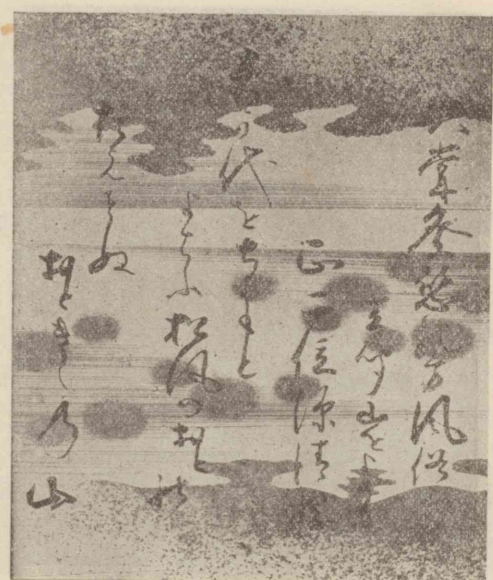
悠紀殿



入江爲守子詠並びに筆

像し奉るにも、森嚴な氣が刻々に迫るやうに覺える。余が着座したのは左方の幄舎で、折しも八日か九日の月が、松の葉越しに白砂の上を照らす。折々一陣の寒風が吹いて、古雅な單調な樂の響が、いつまでも斷えず續くのである。聖上には正に天神地祇を奉請あつて、御對坐あらせられるのである。樂の音の外には、人の音は全くない。眞に莊重嚴肅を極めたものである。この莊重嚴肅な御祭は、太古さながらの建築を傳へた大嘗宮の中に行はれて居るのである。かくて悠紀殿の御祭が終つたのは十一時二十分の頃であつた。

大嘗祭悠紀  
方風俗歌  
音開山を  
よめる  
正二位  
源清綱  
君が代をち  
よもとよば  
ふ松風のお  
とのたえせ  
ぬおとき  
の山

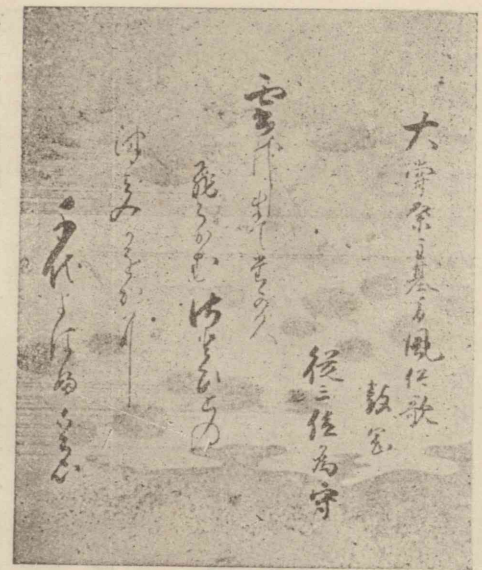


黒田清綱詠並び筆

朝集所へ立戻つて、夜食を賜はる。暖い御酒、熱い吸物、幾度か朱の御盃を傾けて、夜寒も忘れはてる。十五日の午前一時三十分、再び幄舎の座に着く。老齢の大官たちが拜辭して退下したためであらう、幄舎の座席は、以前よりも廣くおぼえる。この度は樂舎が近いので、歌樂の音も一層鮮に聞える。曉の寒さは三十分、一時間、次第に身にしむともにも、嚴肅な氣分は一層に加る。樂の音が止んで、御祭のはてたのは、午前五時二十分であつた。朝集所に退下して、再び御酒、御食を賜はる頃、東の空は漸く明るくなつた。

大嘗祭主基  
方風俗歌  
鼓同  
爲三位  
守  
雲井までた  
かくひどか  
んさと人の  
つゞみが岡  
に千代よば  
ふ聲

威儀の人



江入爲守子詠並び筆

十日の即位の禮には、賢所大前の儀にも、紫宸殿の儀にも、外國の使臣も悉く參列した。それは朝日の輝く御宮、夕日の照らす大庭に行はれたので、莊嚴であり、雄大であつた。それに引きかへて大嘗の大御祭は、夜陰の中に行はせられる。參列の臣僚は柴垣を隔てて、肅然として陛下の夜を徹しての親祭に侍坐するのである。たゞ「森嚴」といひ、「神々しい」といふより外に、形容の語はない。即位の大禮に於ても、遠き國史を想ふの念は油然として湧いた。春興殿前の威儀の人、紫宸殿前の大小錦旗、古き國史の跡を考へて、いよゝゝ國家の昌運を欣慶するの情に堪へず、

今より六十餘年前に御建築になつた紫宸殿に對し奉つては、殊に最近五十年來の皇室の隆運を默想し奉らざるを得なかつた。この太古の儀によらせられた大嘗祭に於ては、更に國史の各時代を超越して、西洋の文明は勿論、唐土、三韓の文化も入つて來ない神代の昔を追念して、我が國體の尊嚴無比なことに、今更のやうに感激するのであつた。

いそのかみ古りし神代の神業を  
をろがみまつるけふのかしこさ。

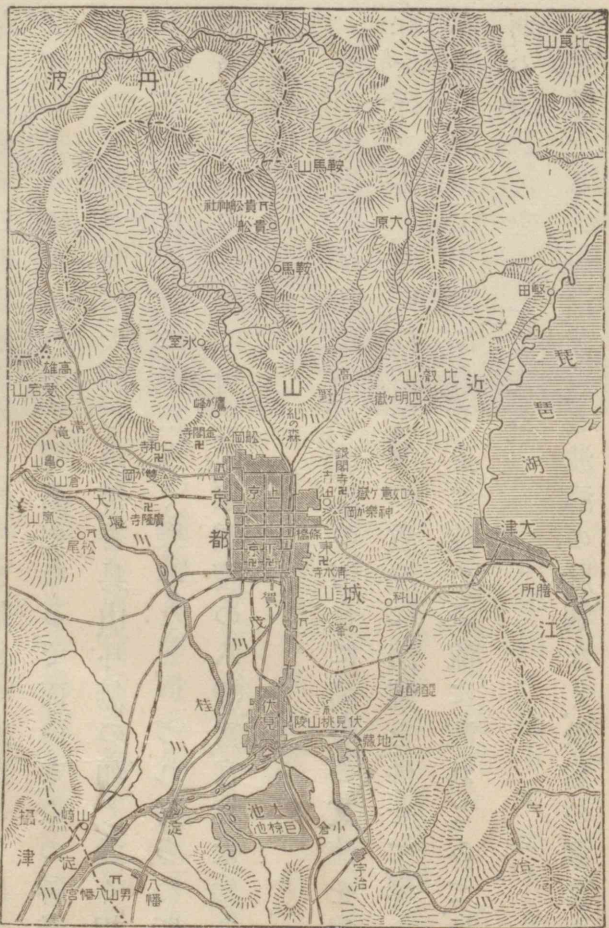
## 二 平安京

藤岡作太郎

日本は世界の樂土なり、東亞のイタリイなり。山川の風景行く所として佳ならざるなきが中に、殊に衆美を聚めたるを京都とす。京都附近の景は日本のすべての景をエキスにしたるもの。規模の雄

エキス

## 擘麗幽婉



峰まで、東山三十六峰笑ふが如く、北には鞍馬、貴船、氷室、鷹が峰、高雄の山々波濤の如く、西にやゝ隔りて愛宕、小倉、龜山、嵐山、松尾より山

大豪壯なるものは存せずといへども、擘麗幽婉の形態は備へざるなし。東に近く比叡如意が嶽より三の



照りはゆ

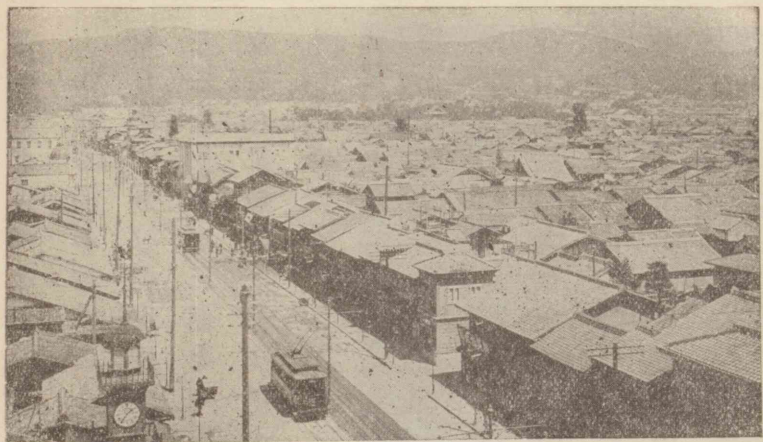
宮柱太知る

茫洋  
浩蕩  
跌宕

崎に至りて地勢は窮る。松柏の緑、色濃き中に、或は目覺むるやうなる櫻の入交るあり、或は紅燃ゆる紅葉を織りこみたるあり。一面の草の頂なる四明が嶽、春なほ雪白き比良の遠山などは、わけて朝日、夕日に照りはゆる色の千變萬化なるぞ面白き。東の神樂が岡、北の船岡、西の雙が岡は、大和の畝傍、香具山、耳無の如く近く相並びてあらねど、子の日の遊に小松曳く樂みなど、いづれ劣らぬ所がら。南に稍隔りて男山これに對し、國家鎮護の八幡宮、宮柱太知りまして、仰ぐもかしこし。

京の東端には賀茂川の流、糺の河合に高野の支流を集めて南に珠を碎き去り、西に桂河、大堰の激湍に清瀧を併せて、琴の音涼しく亦南に向ふ。二川南に合し、更に淀の急流に流れこみて、沈々として西の方難波をさして走る。

茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人心に與



京四都條通より見たる山東

ふるもの少しといへども、一面よりいへば、山の内に籠りて海を見ざるは、またそれだけの長所なくんばあらず。地勢の勾配稍急なれば、蘆間に出て入る白帆の町の側を往來する眺なきかはりに、濁りて底の明らかならざる河水を知らず。京の水はわけてアルカリ性の礦物を含めるにや、曝す布をも、人の膚をも眞白にす。海そのものは清けれど、棄てたる塵埃を更に岸に打上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫など居る所は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬこと多し。京都に海なきは惜しむべし

山紫水明  
姿態

といへども、海なくして清き京都は益、清きなり。  
山紫水明の語はよく京都の景色をいひあらはせり。何處の山水も、日中よりは朝夕の姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむるところなるを知らば、三面を山にして土地濕潤に、水分を含むこと殊に濃なる京都の朝な夕なが、いかに變化に富めるかは、説明を須ひずとも明らかなるべし。嘗て一夏を北陸の海岸に送れることありき。一日驟雨の至れるを見る。疾風さと吹き浪俄に高く、黒雲奔りて魔の如く、見るがうちに重り重りて海を覆ふ。波の音は雲の中に入り、電光閃々、磨る墨の雲間に火花を散らす。波か、雷か、世界はたゞ一暗黒の中に没し去るかと思はれて、凄じかりき。かくの如き壯絶なる景は、我が數年滯留中、遂に京都にては見ることを得ざりしところなり。されど下京より吉田に通ひたる朝な夕の景色は、今もなほ恍惚として眼前にあるを覺ゆ。引渡す霞に、三條の大橋の擬寶珠の、一

黒雲魔の如し

あるかなさ  
かの夢



つ一つ彼方へくと淡  
くなりて、向ふに寝たる  
東山は、あるかなさかの  
夢より未だ覺めやらす。  
女 吉田の岡に並び立てる  
松は、墨繪の刷毛の濃く

隠れて、聲ぞまづ朝靄を漏來る。時雨の景色のまたよその國には見られぬさまよ。愛宕の峰を覆ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちに、はらくと面を撲つ。あはやと驚きもはてず、雲は走りて直ちに東山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かゝる優しき景色は、山河襟帶の平安京の特色なり。

山河襟帶

國文學全史

目修文

三 衣笠山

柳澤健

夜が明け、日が樹のかげに騒ぎ、  
微風が細かい黄金粉を一面に障子にふりまく。

秋。そのさわやかな朝。

自分は障子をあけはなして、

衣笠山を、群青に煙つてゐる松林の山を眺める。

日のなかに、斜に流れる朝の日のなかに

衣笠山はほの冷たい銀のひゞきを、

ゆるやかに聲もなくあたりに散らす

ゆふべ火を圍みながら聴入つた

（一）京都府葛野郡  
衣笠村の西。  
麓に金閣があ  
る。  
群青  
青色のゑの  
ぐ。  
銀のひゞき  
銀色に光つて  
居るのを銀の  
響と見たので  
ある。

看經  
お經をよむこ  
と。  
點鐘  
かれをうつこ  
と。  
さ  
は  
の  
ひ  
ゞ  
き  
ひゞきは今ど  
うなつたらう  
の意。餘り静  
かなのでい  
ふ。

野のなかの尼寺の看經のひゞきは。

點鐘のやうに正しく澄渡つ

た木魚のひゞきは。

自分はそのひゞきをいま衣

笠山のなかに見る。

聲のないひゞきを散らす衣

笠山。なだらかな衣笠山。

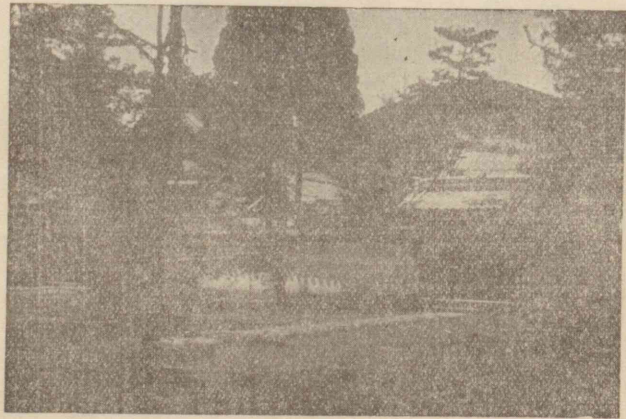
銀いろのかすかなひゞきを

含むなだらかな衣笠山。

自分は庭へ出る、樹と苔との

庭、

水と石との庭、朝の日が騒いでゐる庭へ。



衣笠山と等持院

小鳥が空のなかで、樹のなかで啼いてゐる庭へ。

樹の肌の手を當てると、露と葉とが肩に落ちる。

黄金の太陽の線が落ちる。小鳥の唄が落ちる。

眼をあげると、ほう、海のやうな深い蒼穹。

自分はたばこを口にし、林間を逍遙する。

紫いろのたばこのけむりは、薄い羽のやうに日に光り、

かすかな朝の聲のなかにもつれて消える。

「柳澤さん。お茶がはいりましたよ。おいでなさい。」

樹の葉越しに見える建物から私を呼ぶ聲。

朝の目を浴びた等持院のいらかの朱色。

— 柳澤健詩集 —

(一)衣笠山の南の麓にある臨濟宗の寺。足利將軍の廟所とある。

四 百蟲譜

横井也 有

蝶の花に飛びかひたる、優しきものの限りなるべし。それも、啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそ、なほめてたけれ。さてこそ、<sup>(一)</sup> 莊周が夢も、このものには託しけぬ。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたること幸なれ。<sup>(二)</sup> 朧月夜の風静まりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛びて、翁の目覺したれば、この者のこと、更にも誇り難し。

蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の頃、端居珍しき夕、始めてほのかに聞きたらん、又は長月の頃、力なく残りたる、さびしき方もあり。蚊屋つりたる家のさま、蚊やりたく里の煙など、かつは風雅の道具となれり。蚊蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇のひまなかりけん。

(一)支那周代の人。孟子と同時代。世に莊周と稱す。  
(二)古今集序「花になく驚水にすむ蛙の聲をきけば、生きたし、いづれか歌をよまざりける云々。」  
(三)「古池やかはづとびこむ水の音。」(芭蕉)  
(四)晋の嵇康の交りし奇士。阮籍、山濤、向秀、劉伶、阮咸、王戎、阮裕、竹林の七賢これなり。

(一)「やがて死ぬ  
ずけしきは見え  
ず蟬の聲」  
(芭蕉)

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。やゝ日ざかりに  
鳴きさかる頃は、人の汗絞る心地す。されば、初蝶とも、初蛙ともいふ  
ことをきかず、このものばかり初蟬といはるゝこそ、大いなる手柄  
なれ。やがて死ぬ氣色は見えず」と、この者の上は、翁の一句に盡きた  
りといふべし。

日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は  
草に露おく頃ならん。つくづく、ぼふしといふ蟬は、つくしこひしと  
もいふなり。筑紫の人の旅に死して、このものになりたり」と、世の諺  
にいへりけり。あはれは蜀魄の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蠶の生涯は世の爲に終り、火取蟲は誰が爲に身を焦すにか。蜉蝣  
ははかなき例に引かれ、蓼食ふ蟲は物好の謗となれり。

同じ寶の名によばれて、玉蟲は優しく、こがね蟲は卑し。

蝸牛はたゞ水にあるべき者の、いかで草葉に遊ぶらん。家は持ち

(一)原は静岡縣駿  
東郡。吉原は  
同富士郡。十  
三にも往昔五  
驛の一。

ひくつけき

(二)「秋風に結び  
ねらし藤袴、  
ついでさして  
ふりざりす  
なく」(古今  
集、在原棟梁)



(筆信元野狩) 賢七の竹林

たれども、ゆく先々を負ひ歩くは、雲水の  
安きにも似ず。

蟹の歩に譬ふべき物こそなけれ。たゞ  
原、吉原を、駕籠に乗りて、富士を眺めゆく  
人にぞ似たる。

機織、鈴蟲、轡蟲は、その音の似たるをも  
て名を呼べり。松蟲のその木にもよらぬ  
に、いかでかく名を附けたるならん。毛生  
ひむくつけき蟲にも同じ名ありて、松を  
枯し、人に疎まる。一つ在所に二人の八兵  
衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生  
を事とす。これ松蟲の類なるべし。

蟋蟀のつゞりさせとは、人の爲に夜寒

を教へ、藻にすむ蟲はわれからと、たゞ身の上を歎くらんを、蓑蟲のちゝよと呼ぶは、いとやさしげなり。されど、父のみこひて、などか母を慕はざるならん。

鶉衣

### 五 落花の雪

落花の雪に踏みまよふ、交野の春の櫻狩、紅葉の錦着て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜をあかすほどだにも、旅寝となれば物憂きに、恩愛の契淺からぬ、我が故郷の妻子をば、行方も知らず思ひおき、年久しくも住馴れし、九重の帝都をば、今を限りと願て、思はぬ旅に出て給ふ、心の中ぞあはれなる。

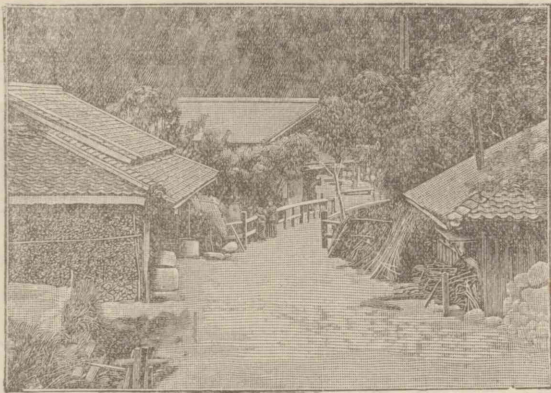
憂きをば止めぬ逢坂の、關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱、沖を遙かに見渡せば、潮ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟のうき沈み、駒もとゞろと踏鳴らす、勢多の長橋打渡り、行交ふ人にあふ

(一) 又や見ん交野のみ野のさくら狩、花の雪、春の曙、(新古今集、藤原俊成)  
(二) 河内國北河内郡、(朝まだき嵐の山のさむければ、紅葉の錦きぬ人ぞなき、(公遺集、藤原公任)  
(三) 近江國滋賀郡にあり。  
(四) 貢物たえずそなふる東路の、勢多の長橋音もとゞろに、(風雅集、平兼盛)

(一) 近江より朝たち來れば、うねの野に、田鶴ぞなくなる明けぬこの夜は、(古今集、大歌所の歌)  
(二) 白露も時雨もいたく守山は、下葉のこけり、(古今集、紀貫之)

人住まぬ不破の關屋の板庇、荒れにし秋の風、(新古今集、藤原良經)  
(四) うちわたす今か沙干になよみ、湯とをよる舟の聲も通はず、(夫木集、常磐井入道)

捨小舟



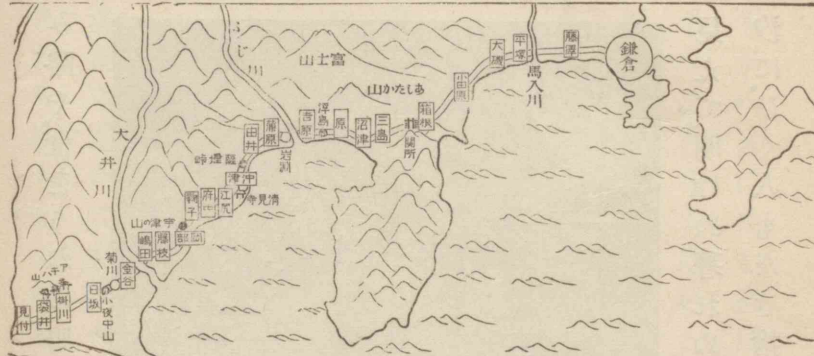
み路や、世をうねの野に鳴くたづも、子を思ふかとあはれなり。時雨

池 見えわかず、物を思へば夜のまにも、老  
田 その森の下草に、駒を止めて願る、故郷  
宿 を雲や隔つらん。

宿 番場醒が井、柏原、不破の關屋は荒れはてて、なほもるものは秋の雨、いつか我が身のをはりなる、熱田の八つるぎ伏拜み、沙干に今や鳴海、瀨傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕汐に、ひく人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰かあはれ

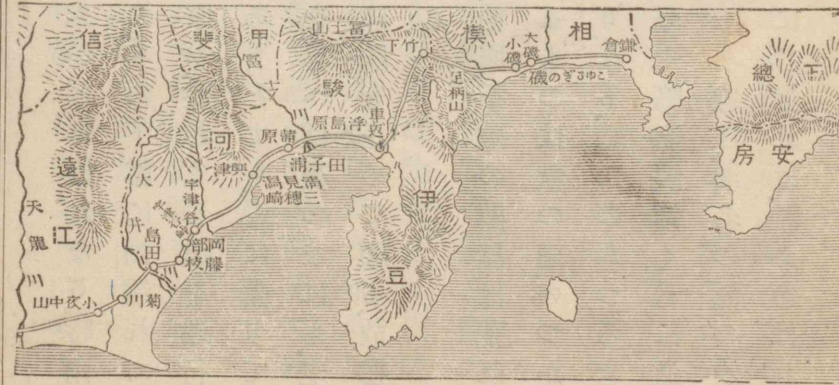
五 落花の雪

(一)遠江國天龍川の東岸にあり。古は西岸にありき。  
(二)安徳天皇の御代。  
(三)平清盛の子。元暦元年(壽永三年)一谷の戦に源義経に捕へられ、鎌倉に送らる。



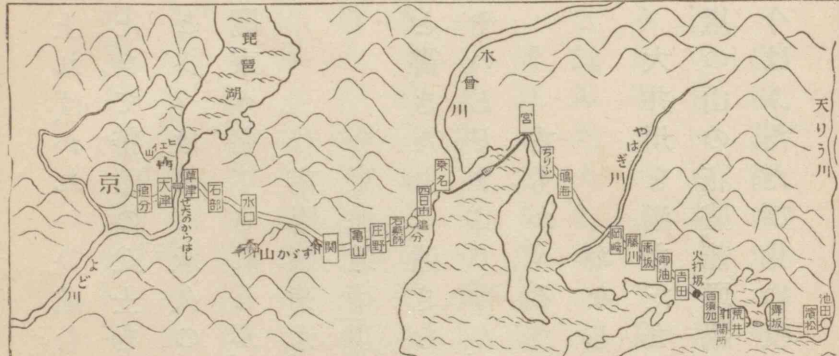
しばゆ

と夕暮の、入相なれば今はとて、池田の宿に着き給ふ。  
元暦元年の頃か、とよ、重衡の中將の東夷の爲に捕はれて、この宿にやどり給ひにし、その古のあはれまでも、思ひ残さぬ涙なり。  
旅館の燈かすかにして、鶏鳴曉を催せば、匹馬風にいば

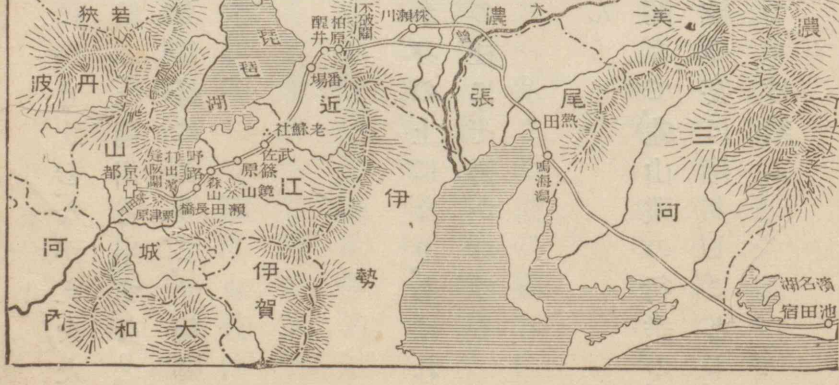


(一)年たけて復こゆべしとおもひきや、命なりけり小夜の中。山。古今集。西行法師。

亭午



えて、天龍川をうち渡り、小夜の中山越えゆけば、白雲道を埋み来て、そのことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔の天を望みても、昔西行法師が、命なりけり。と詠じつゝ、二たび越えし跡までも、羨ましくぞ思はれける。  
隙ゆく駒の足早み、日すてに亭午に



(一)遠江國榛原郡  
(二)仲恭天皇の承久三年

上れば、かれいひ進むるほどとて、輿を庭前にかき止む。ながえをた  
たきて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなり。  
と答へければ、承久の合戦の時、院宣かきたりし咎によりて、光親卿  
關東へ召下されしが、この宿にて殺されし時、

昔南陽縣菊水。 汲下流而延齡。  
今東海道菊川。 宿西岸而終命。

と書きたりし、遠きむかしの筆の跡、今は我が身の上になり、あはれ  
やいとどまさりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

古もかゝるためしをきくがはの

おなじながれに身をや沈めん

大井川を過ぎたまへば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の、  
嵐の山の花盛、龍頭鶴首の舟に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、  
今はふたたび見ぬ夜の夢となりぬと、思ひつゞけ給ふ。

(三)山城國葛野郡  
嵯峨にあり、  
今の天龍寺こ  
れなり。

(一)ともに駿河  
國志太郡。  
(二)歸り來る程  
はなけれど朝  
露の、岡邊の  
眞葛うち枯れ  
にけり。(藤  
原爲家)  
(四)駿河なる宇  
津の山べのう  
つにも、夢  
にも人にあは  
ぬなりけり。  
(伊勢物語)  
(五)駒とめて過  
ぎそやられぬ  
清見濁、ちり  
しく花や波の  
關守。(風雅  
集、法橋顯昭)  
(六)富士の嶺の  
煙はなほぞ立  
ちのぼる、上  
なきものはお  
もひなりけり。  
(新古今  
集、藤原家隆)  
(七)こゆるきの  
いそちぢなら  
し磯來つむら  
めざしぬらす  
な沖に居れ  
相模歌)古今集、  
(八)後醍醐天皇の  
元弘元年。

(一) 島田藤枝にかゝりて、岡べの眞葛うら枯れて、物悲しき夕暮に、宇  
津の山べを越えゆけば、蔦、楓いと茂りて道もなし。昔業平中將の、す  
みかを求めんとて、東の方へ下るとて、夢にも人にあはぬなりけり。  
と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。

清見がたを過ぎ給へば、都にかへる夢をさへ、通さぬ波の關守に、  
いとど涙を催され、むかひはいづこ三保が崎、興津、蒲原うち過ぎて、  
富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思にくらべつゝ、  
明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎゆけば、しほひや浅き舟見え  
て、おりたつ田子のみづからも、うき世をめぐる車がへし、竹の下道  
ゆきなやむ、足柄山のたうげより、大磯、小磯見おろして、袖にも波は  
こゆるきの、いそぐとしもはなけれども、日數積れば七月二十六日  
の暮ほどに、鎌倉にこそ着き給ひけれ。

——太平記——



(一)後醍醐天皇の  
延元元年(一  
九九六年)五  
月、九州の大  
軍を率ゐて上  
洛す。

### 六 櫻井の驛

機に乗る  
驅合はす  
決定

尊氏卿、直義朝臣、大勢を率して上洛の間、要害の地に於て防ぎ戰はん爲に、兵庫に引退きぬる由、義貞朝臣早馬を進めて、内裏に奏聞ありければ、主上大いに御騒ぎあつて、楠木判官正成を召されて、急ぎ兵庫に罷り下り、義貞に力を合はせて合戦すべし。と仰せられければ、正成長まつて奏しけるは、尊氏卿すでに筑紫九國の勢を率して上洛候なれば、定めて勢は雲霞の如くにぞ候らん。身方の疲れたる小勢を以て、敵の機に乗りたる大勢に驅合はせて、尋常の如くに合戦を致候はば、身方決定打負け候ひなんと覺え候なれば、新田殿をもたゞ京都へ召し候ひて、前の如く山門へ臨幸なり候べし。正成も河内に罷り下り候うて、畿内の勢を以て河尻をさし塞ぎ、両方より京都を攻めて、兵糧をつからかし候程ならば、敵は次第に疲れて

搦手

料簡

とてもかく  
とも

勅答

僉議

(一)左大辨參議。

節度使

(二)延元元年正  
月、尊氏の上  
洛をさけて行  
幸あり。

落下り、身方は日々に随つて馳集り候べし。その時に當つて、新田殿は山門より押寄せられて、正成は搦手にて攻上り候はば、朝敵を一戦に滅さんことありぬと覺え候。新田殿も定めてこの料簡候ひなん。たゞ路次にて一軍もせざらんは無下にいふがひなく人の思はんずるところを耻ぢて、兵庫に支へられたりと覺え候。合戦はともかくても、始終の勝こそ肝要にて候へ。よく遠慮を廻らされ、公議を定めらるべきにて候。と勅答せられけり。

されば列座の諸卿いづれも、誠に軍旅の事は兵に讓られよ。と僉議ありけるに、重ねて坊門宰相清忠申されけるは、正成が申すところもその謂ありといへども、征伐の爲に差下されたる節度使、未だ戦を爲さざる前に、帝都を捨てて一年の内に二度まで山門へ臨幸なさんこと、且は帝位の輕きに似、又は官軍の道を失ふところなり。たとひ尊氏筑紫勢を率して上洛すとも、去年東八箇國を順へて上

鉄鉞

りし時の勢にはよも過ぎじ。凡そ戦の初より敵軍敗北の時に至るまで、身方小勢なりといへども、毎度大敵を攻靡けずといふことなし。これ全く武略の勝れたるところにはあらず。たゞ聖運の天になへる故なり。さればたゞ戦を帝都の外に決して、敵を鉄鉞の下に



櫻井驛址

滅さんこと、何の仔細かあるべきなれば、たゞ時をかへず、楠木罷り下るべし。とぞ仰せ出されける。

る。正成これを最後の合戦と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふやうありとて、櫻井の宿より河内へ返し遣はすとて、庭訓を残しけるは、獅子子を産んで三日を経る時、數千丈

庭訓

忠烈若黨

若草り  
おたう  
もしま  
かけや  
庭の教  
を知らん  
か  
正成



楠公父子訣別の圖  
(筆 齋 容 池 菊)

の石壁よりこれを擲ぐ。その子獅子の氣分あれば、教へざるに宙より跳ねかへりて、死なずといへり。況や汝すでに十歳に餘りぬ。一言耳にとゞまらば、我が教誠に違ふことなかれ。今度の合戦天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顔を見んこと、これを限

(一)河内國南河内郡。  
 (二)支那古代の弓の名人。百歩の外に柳葉を射て百發百中すといふ。  
 (三)漢の高祖の臣。高祖の項羽に圍まれて危かりし時、身代りとなりてこれを助く。  
 (四)秦穆公に仕ふ。  
 (五)百里奚の子。  
 良弼 一揆

一人も死にのこりてあらんほどは、金剛山の邊に引籠つて、敵寄せ來らば命を養由が矢さきに懸けて、義を紀信が忠に比すべし。これぞ汝が第一の孝行ならんずる。」と泣くく、申し含めて、各東西へ別れにけり。

昔の百里奚は穆公晋の國を伐ちし時、戰の利なからんことを鑒て、その將孟明視に向つて今を限りの別を悲しみ、今の楠木判官は、敵軍都の西に近づくと聞きしより、國必ず滅びんことを愁ひて、その子正行を留めて、なき後までの義を勸む。彼は異國の良弼、これは吾が朝の忠臣、千載を隔つといへども、前聖後聖一揆にして、有難かりし賢佐なり。

——太平記——

### 七 人臣の道

北畠親房

凡そ王土に生まれて忠を致し命を捨つるは、人臣の道なり。必ず

きほひ争ふ

前車の轍

制符

語らはる

これを身の高名と思ふべからず。されど後の人を勵まし、その跡を  
 愍びて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ争ひ申すべき  
 にあらぬにや。ましてさせる功なくして、過分の望をいたすこと、み  
 づから危うするはしなれど、前車の轍を見ることは、まことに有難  
 きならひなりけんかし。中古までも、人のさのみ豪強なるをば戒め  
 られき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅し、家を失  
 ふためしあれば、戒めらるゝもことわりなり。

鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬することを停む  
 べし。といふ制符たびくありき。源平久しく武をとりて仕へしか  
 ども、事ある時は宣旨を賜はりて、諸國のつはものを徴し具しける  
 に、近代となりて、やがて語らはるゝやから多くなりしによりて、こ  
 の制符は下されにき。果して今までの亂世の基なれば、いひがひな  
 きことになりにけり。

言語は君の樞機

堅き氷は霜を履むよりいたる

(一)支那上古の人。  
(二)支那上古の名君。  
(三)堯の時の隠士。  
五臟六腑

この頃の諺には、一たび軍に驅合ひ、或は家の子、郎從節に死ぬるたぐひもあれば、我が功におきては、日本國を賜へ。若しは、半國を賜はるとも足るべからず。などぞ申すめる。誠にさまで思ふ事にはあらじなれど、やがてこれより亂るゝはしともなり、また朝威のころがろしさも推量らるゝものなり。言語は君子の樞機なり。といへり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕ることはあるべからぬことにこそ、堅き氷は霜を履むよりいたるならひなれば、亂臣賊子といふ者は、そのはじめ心詞を慎まざるより出てくるなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光の變るにもあらず、草木の色の改るにもあらず、人の心の惡しくなりゆくを末世とはいへるにや。昔許由といふ人は、帝堯の國を傳へんとありしを聞いて、潁川に耳を洗ひき。巢父これを聞きて、この水をだにきたながりて、渡らざりき。その人の五臟六腑の變るにはあらず。よく思ひならはせる故にこそあらめ。

萬姓の主



北 島 親 房

なほ行末の人の心想ひやるこそあさましけれ。大かたおのれ一身は恩に誇るとも、萬人の怨を残すべき事をばなか顧ざらん。君は萬姓の主にてましませば、限りある地をもちて、限りなき人に頒たせ給はんことは、推してもはかり奉るべし。若し一國づつを望まば、六十六人にて皆ふさがりなん。一郡づつといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は悦ぶとも、千萬の人は悦ばじ。いはんや日本の半ばを心ざし、みながら望まば、帝王はいづくを知らせ給ふべきにか。かゝる心の萌して言葉にも出て、面にも耻づる色のなきを謀叛のはじめとはいふべきなり。昔の將門の比叡山に登りて大内

(一)漢帝の第一代。姓は劉、名は邦。

籌を帷幄の中にめぐらす

(二)後鳥羽天皇の文治五年(一八四九年)。(三)藤原泰衡。(四)畠山重忠。(五)昔は奥州五十四郡。

を遠見して、謀叛を思ひ企てけるも、かゝるたぐひにやありけん。昔は人の心正しくして、自ら將門に見も懲り聞きも懲り侍りけんを、今は人々の心かくのみなりにたれば、この世は愈々衰へるにや。  
漢の高祖(一)の天下をとりしは、蕭何、張良、韓信が力なり。こを三傑といふ。萬人にすぐれたるを傑といふとぞ。中にも張良は高祖の師として、籌を帷幄の中にめぐらして、勝つことを千里の外に決するはこの人なり。と宣ひしかど、張良は驕ることなくして、留といひて少しきなる所を望みて封ぜられにけり。あらゆる功臣多く滅びしかど、張良は身を全くしたりき。近き世のことぞかし、頼朝の時までも、文治の頃にや、奥の泰衡(三)を追討せしに、みづから向ふことありしに、平重忠が先陣にてその功すぐれたりければ、五十四郡のうちいづくをも望むべかりけるに、長岡郡とてきはめたる少き所を望みて賜はりけりとぞ。これは人に廣く賞をも行はしめんためにや。賢か

神皇正統記

りけるをのこにこそ。

八 妹(一)に諭す

吉田松陰

(一)松陰の長妹千代子。安政六年四月十三日松陰萩の野山の獄中にてこの書を認む。

精進潔齋

この間は御文下され、觀音様の御洗米、三日の精進にて頂き候やうとの御事、御親切の御志感じ入り申候。精進、潔齋などは、随分心のかたまり候ものにて、宜しき事と存候につき、拙者も二月二十五日より三月晦日まで少々志の候ひて、酒肴など一向食へ申さず候。その間一度靈神様御祭の物頂戴致候ばかりに御座候。まして三日の精進はさまでむづかしき事にもこれなく、御親切の事に候へば、相果し度存候ところ、當所にてはあたりまへの精進の外に、又精進と申候ひては、連中又は番人ども、何故と怪しみ尋ね申すべく候につき、それをそれと相答へ候事面倒に存候故、八日は幸ひ精進日なれば、その日一日に頂き申候。

八 妹に諭す

首の座に直

抑、観音様信仰せよとの事は、定めし禍をよけ候爲なるべく、これ  
は大いに論のある事に候へば、委細申し進ずべく候。法華經第二十  
五の卷、普門品と申すに、観音力と申す事高大に述べてこれあり候。  
大意は、観音を念じ候はば、繩目に懸り候ひても、忽ちぶつくと繩  
が切れ人屋に捕はれ候ひても、忽ち錠、鍵が外れ、又首の座に直り候  
ひても、忽ち刀が千々に折るゝなど申してこれあり候。これは拙者  
江戸の人屋にて、この經は幾度も繰返し讀みて見候へども、始終こ  
の趣に候。それ故、凡人はこれより有難き事はなしとて信仰するも  
無理はなく候。

大乘小乗  
下根上根  
ひたもの

さりながら、佛の教は奇妙なる仕懸にて、大乘、小乗と二つに分ち  
て、小乗は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定めこれあり  
候。小乗にては、観音は右の經文の通りのものと心得、ひたもの信仰  
せしむる事に御座候。これは大いに信を起さする爲なり。信を起す

とは、一心に有難い事ぢやとのみ思ひこみ、餘念他慮なきことにて、  
一心不亂と申すもこの事なり。人は一心不亂になりだにせば、何事



松陰の筆蹟

三分出處皆爲己矣夫一身入洛有買靴者在哉  
心師實高而無素立名者仰希逆号遂之釋難才  
讀書無功可操學三十年賦賦失計有極氣廿一四  
人識狂頑分柳黨衆不容身許家國分死生吾久齋  
至誠不効分自古未之有人宜立志号聖賢取道倍  
乙未五月有開左之毛時將經深重復難期余  
西以永秋若讀友使浦無窮者係自發之頑  
無窮知者若此特号君貌而已哉况君之自發才儲  
女其深敬之乎御禮市以幅乃有上色心  
二十一四猛士藤堂撰共書

退轉

に臨みても、ちつとも頓着なく、繩目も、人屋も、首の座も平氣になら  
れ候故、世の中に、いかに難題苦患の來るとも、それに退轉して不忠、  
不孝、無禮、無道等仕る氣遣はなし。されど初より凡夫に、一心不亂の、

不退轉

不退轉のと申し聞かせても、少しも耳に入らぬもの故、かりに觀音様をこしらへて信を起させ候教に御座候。これを方便とも申候。

さて又大乗と申す方にては、出世法と申す事が肝要に御座候。出世と申しても、立身出世など申す事には御座なく候。その初は、釋迦が天竺王の若殿に候ひしところ、若き時より感の強き人にて、老人を見ては、我が身も往くさきは老人にならんかと悲しみ、死人を見ては、我が身も往くさきは死なんかと悲しみ、蟲けらの死にたる、草木の枯れたるまでに悲みを發し、生老病死がこの世の習なれば、是非にこの世を出ねばすまざると志を立てて、年二十五の時、位を棄てて山に入り、右の生老病死を免るゝ修行をしに參られ候。さ候ひて三十出山とて、わづか五年の間に生老病死を免るゝ事を悟り、生まれもせねば老いもせず、病みも死にもせぬ事を悟つて出て來て、それより世の人を教化せられたり。これが即ち出世法なり。故に出世

生老病死

せずては濟世の出來ぬと申すもこの事なり。濟世といふは、即ちこの世の人を濟度する事に御座候。

さてその死なずと申すは、近く申さば、釋迦の、孔子のと申す御方は、今日まで生きて居らるゝ故、人が尊みもすれば、有難がりもし、恐れもするなり。果して死なぬに候はずや。死なぬ人なれば、繩目も、人屋も、首の座も、前申す觀音經の通りには候はずや。楠木正成とか、大石良雄とか申す人々は、刃ものやいばに身を失はれ候へども、今以て生きて居らるゝなり。即ち刀の千々に折れたる證據なり。

塞翁が馬

さてまた、禍福は繩の如し。といふ事を御悟りなるが宜しく候。禍は福の種、福は禍の種に候。人間萬事塞翁が馬に御座候。拙者など人屋にて死ぬる事に候へば、禍のやうなものに候へども、また一方には學問も出來、己のため、人のため、後の世へも残り、かつ、死なぬ人々の仲間入りも出來候へば、福この上もなき事に候。人屋を出て

候へば、またいかなる禍の來んも知れ申さず候。勿論その禍の中にはまた福も交り候へども、所詮一生の間難儀だにせば、先には福あるべし。何の効驗もなき事に、觀音に頼みて福を求むるやうの事は、必ずく無益に存候。されば拙者の氣遣に、觀音様を念ずるよりは、兄弟甥姪の間に、樂は苦の種、福は禍の本と申す事をとくと申し聞かする方が肝要なり。

尙又一つ、拙者不孝ながら孝に當る事あり。兄弟の中一人にてもふざまのわろき人あれば、あとの兄弟も自然と心が和ぎて孝行するやうになり、兄弟も睦まじくなるものなり。これより拙者は、兄弟の代りにこの世の禍を受合ふ故、兄弟中は拙者の代りに、父母様へ孝行してくるゝがよし。さればつゝまるところ兄弟中皆よくなりて、はては父母様の御仕合、又子供が見習ひ候へば、子孫の爲これ程めでたき事はなきにあらずや。よくく御勘辨候ひて、(一)小田村久坂(二)久坂玄瑞の姉

ふさま

(一)小田村素太郎・松喰の妹  
壽子の婿  
(二)久坂玄瑞の姉  
じく妹美和子の婿

なんどへもこの文御見せあるべし。佛法信仰はよきことなれど、佛法に迷はぬやうに、心學本なりと折々御見候へかし。心學本に、

のどけさよ願なき身の神まうて

神へ願ふよりは、身に行ふが宜しく候。

松喰  
— 俗簡襍輯 —

自修文

九 簡易生活

衣食住に簡易であることは、日本人の美德である。上代の衣服には曲玉まがたまのやうな珠をかけた事が見えたが、これとても今日から見れば、鹿末しかすえな物、しかもそれは高貴な身分の方に限られたらしい。他は概して今日の朝鮮人のやうに飾のない白い服だけで、何等の裝飾もなかつた。随分文明の發達しない野蠻人でも、裝飾を好む人種は、鳥の羽を附けたり、獸の皮を附けたり、貝を飾つたりするが、日本にはその風がない。本來が食物住居ともに簡易に



(一)元明天皇の和  
 銅三年から延  
 暦十五年まで七  
 十五年間  
 (二)桓武天皇の延  
 暦十三年都を  
 平安京即ち今  
 の京都に置か  
 れてから、壽  
 永三年平家滅  
 亡まで三百九  
 十年間  
 (三)鎌足の時藤原  
 の姓を賜はつ  
 たに始る盛平  
 安時代甚だ盛  
 であつた  
 (四)藤原時平、延  
 喜九年(一五  
 六九年)薨、年  
 三十九  
 過差  
 おごり、驕奢、  
 (五)禁中の故事を  
 記した物。  
 (六)九條石大臣。  
 朱雀天皇に仕  
 ふ。天徳(一十  
 一年)薨。年五十三。  
 遺誠  
 死ぬ時言ひお  
 くいませぬ。

甘んずるといふ風がある。  
 文明の進むに随つて、種々な贅澤の進むのは自然のこととて、奈  
 良時代、平安時代と、段々生活程度の進んで來たのは事實である。  
 平安時代になつて驕奢に流れたといふし、藤原氏など上流社會  
 の者が奢侈に流れたことはあつたが、朝廷が驕奢をなさつて、下  
 民の怨恨を買はれたといふやうな例は一つもない。醍醐天皇が  
 左大臣時平と謀つて、朝臣の衣服の過差を止められたやうな類  
 は多い。又順徳天皇の禁秘抄に、公の奉り物はおろそかなるをよ  
 しとす。と書かれ、九條師輔の遺誠にも、  
 凡身中家内之事、始自衣冠、及于車馬、隨有用之。勿求美麗。  
 とあるのは徒然草にも引いてある。外國の歴史を見ると、支那で  
 も、西洋でも、上王者たる人が、驕奢に耽つて租税をはたつて下を  
 虐げる。下民の怨の聲から世が亂れる。これは數へ切れぬ程多い。  
 然るに日本にはそんな例は一つもない。民の貧苦をあはれんで

はたる  
 しひて取りた  
 てる。  
 (七)仁徳天皇。  
 (一)醍醐天皇。  
 通觀す  
 全體をすつと  
 とぼして見

施政の方針  
 の政を行ふ。定  
 の目あて。

執權  
 將軍をたすけ  
 て一切の政を  
 行つた人。

時代の精神  
 その頃の世の精  
 神の中の一一般の精

租税を免除したり、飢寒を察して御衣を脱した例こそあれ、二千  
 五百年來の歴史を通觀して、皇室が下民を虐げた例は決してな  
 い。皇室は禮儀、道德、風雅等の淵源であつたが、儉約の徳に於ても、  
 朝廷はやはり模範となられたのである。  
 鎌倉になつての幕府の政は、全く勤儉で押通した。頼朝は衣服  
 に於ても自らその例を示して居る。何事も質素簡易を旨とする  
 のが、幕府施政の方針であつた。それ故鎌倉時代の話として傳は  
 つて居るのは、儉約に關する事が多い。中にも北條時頼の儉約な  
 話は、徒然草に味噌を戸棚から尋ね出して酒を飲んだ話がある。  
 時の執權としては儉約なことである。その母の松下禪尼が、明障  
 子の切張をした事も徒然草にある。時頼の用ひたといふ青砥藤  
 綱といふ人は、歴史上あつたか、なかつたか疑はしい人物である  
 さうなが、とにかく十文を落して五十文の松明をとぼして拾つ  
 たといふ儉約な話があるが、やはり時代の精神を示して居る。儉

條文に立て

る規則の中に明記してある。

論宗教上の理

樹下石上木の下の石の上で、即ち山野や道ばたなど

一鉢一衣たぐはつと一着のころ

雲水行脚僧の修業のため諸國をめぐり歩くこと

度外意にとめずかまはない

超然たる態世の中の俗事からぬけ出た舉動

禪三昧深く禪に入つて心の亂れないこと

行雲  
流水

身にまかせ  
りてゆく  
こと

流

約をして何かの時には役に立たさうといふので、平素は庵衣庵食に甘んずるといふことは、武家を通じての教訓である。足利時代になつての各家の家法家憲ともいふべきものは、いづれも儉素を條文に立てて居る。山内一豊の妻のやうに、平素貧困に甘んじて、馬を買ふ時に金を吝しまぬといふやうな心掛が、武士の妻の模範として見られた。

上に立つ武士がその通りであつたのみならず、佛教の教理からも亦これを助けた。といふのは、武家が奨励した佛法は禪宗で、この禪宗は樹下石上に法を説くのを主眼として、一鉢一衣の生活に満足して、雲水行脚して淡泊な生涯を送つた。いはゆる禪味といふのは、寂味を主として榮華に遠ざかつた。すべて富貴榮華を度外に見るといふ超然たる態度を以て、禪三昧に達するものとした。茶の味、豆腐の味がその生命である。賑やかな花やかな事は成るべく棄てて顧まない。鎌倉以後の五山の僧侶等は、學問見識

を以て將軍にも頭を下げさせたが、富貴を貪らうとはしない。常に富貴に遠ざかつた態度を以て、將軍をも屈服させたのである。足利將軍の驕奢といつても、何程のことでもなかつたらうと思ふ。金閣、銀閣を見ても大抵は祭せられる。總じて世間の富貴や驕奢に近づくと者は、寧ろ下品な所行として擯斥する氣風が、この時代を支配して居た。即ち高尚といふこと、又風流とか風雅とかいふのは、富貴に遠ざかつて、簡易な生活をする事だといふ思想が流行したのである。徒然草を見よ。一方古代を慕ひ、平安時代を追慕し、皇室の儀禮を尊ぶ思想が多いと同時に、生活はすべて簡易なるがよいとて、唐から來る物は、藥の外用のある物はないとまで言つたではないか。俳人は和歌者流に對して起つた一種の平民的文學者であるが、これも淡泊洒落を以てその道の眞意を得るものとした。足利時代の連歌者流にも、すでにその氣風が認められるが、芭蕉の説くところ、俳味は奈良茶にありとした。奈良

義滿や義政の所行

おこなひ。

時代を支配

する

その時代一般の氣風であつた。

追慕す

おひしたふ。

唐の物は藥の外はなくも、事かくまじきもの外は、無用の物どもを取

積みて所せくわたり來るいと愚かなり。

和歌者流(徒然草)

問歌よみの仲

淡泊洒落

あつさりさつばりしてゐること。

連歌

三十一文字の歌の上の句と下の句とを二

人でよむもの。又これを連ねて五十句も百句も連ねるもの。

明瞭子  
か  
か  
か

められるが、芭蕉の説くところ、俳味は奈良茶にありとした。奈良

幫間的 人にへつらひ  
 機嫌をとるや  
 うなの意  
 閑寂 ものしづか  
 であらびしみ  
 のあること  
 眼を眩す 富貴で目をく  
 らませる  
 厭世 世の中をきら  
 ふこと  
 富貴を超越 富貴を眼中に  
 おかない  
 一斷 斷じて元の申  
 込を聴かず開  
 戦に決したこ  
 と  
 禪宗の安心 禪宗では信仰  
 によつて心の  
 趣くところを  
 きめ一切の苦  
 から離れて安  
 心することをも  
 殊につとめ

茶といふのは茶粥である。俳人中には品性の悪い幫間的な者もあつたが、芭蕉の風流は淡泊な生涯を風流としたのである。右の通りであるから、俳人はその家の節に美しい金びかの物を用ひない。すべてが閑寂な味を以てして、一椀の抹茶に一幅の掛物、一輪の花ざして、趣味をその中に求める。物の多くを望まず、少しにして足る。富の眼を眩するを望まず、貧しきを以て安んずる。かういふ淡泊な氣象であるから、人を羨まず、世を恨まない。禪家といひ、俳家者流といひ、隱遁世棄人に似て、實は世間に立交つて、その榮華に心を惑はされないといふ境域に達したのである。佛教は國民を厭世にするといふが、日本では寧ろそのよい方ばかりがあらはれた。その質素の風と、思ひきりのよいところ、富貴を超越した點は、武士の決斷及び質素に影響したことが少くない。元寇の役の一斷などは、禪宗の安心に由來することが多かつたらうと思ふ。

似て非 似たやうでち  
 がつてゐる。  
 分を守る 身分を忘れな  
 いこと。

伊加(イカ)

(一)天地者萬物  
 之逆旅。光陰  
 者百代之過  
 客。云々。李  
 白、春夜宴桃  
 李園序

この祖先の風は、いつまでも保存しなければならぬ。しかし食ふ物も食はずに儉約するのは、もとより儉約ではない。儉と吝とは似て非なるものとは、昔の人も言つた。積極的にはたらく爲には飯も澤山食べねばならぬ。たゞ分を守るといふ心得が肝要である。木綿着に慣れ、麥飯に甘んじた老農は、絹布を纏ひ、白米を食ふのを勿體ないといふ。この勿體ないといつて身のほどを守るだけは、いつまでも保存したいと思ふ。恭儉己ヲ持シて、成るべく新しい贅澤に遠ざからなければならぬ。

一〇 奥の細道 その一

松尾芭蕉

(一) 月日は百代の過客にして、往きかふ年も亦旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口捉へて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を棲處とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風

(一)元祿元年。

(二)江戸深川六間堀にありき。

(三)武藏國南足立郡。東京の東北口。

に誘はれて漂泊の思やまず、海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を掃ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關越えんと、そゞろ神のものにつきて心を狂はせ、道祖神の招にあひて、取るもの手につかず、股引の破を綴り、笠の緒つけかへて三里に灸すうるより、松島の月まづ心にかゝりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移る。

草の戸も住みかはる代ぞ雛の家

彌生も末の七日、曙の空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の嶺かすかに見えて、上野、谷中の花の梢、またいつかはと心細し。睦まじき限りは宵より集ひて、船に乗りて送る。千住といふ所にて船をあがれば、前途三千里の思胸に塞がりて、幻の巷に離別の涙をそゞぐ。

行く春や鳥啼き魚の眼は涙

矢立

(一)武藏國北足立郡。奥州街道にあたる。

これを矢立の始として、行く道なほ進まず。人々は途中に立並び



茶 贊 芭 蕉 像

て、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

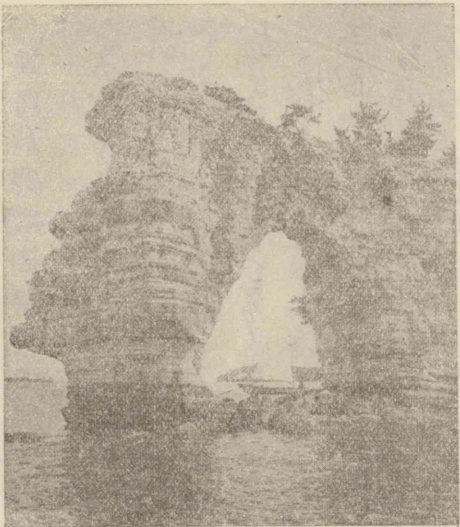
今年元祿二年にや、奥羽長途の行脚たゞ假初に思ひ立ちて、吳天に白髪を恨を重ぬといへども、耳に觸れて未だ目に見ぬ境、若し生きて還らばと定めなき頼の衣をかけ、その日漸く草加といふ宿にたどり着きにけり。瘦骨の肩にかかれるものまづ身を苦しむ。たゞ身すがらにといてたてるを、紙衣一具は夜の防ぎ、浴衣、雨具、墨、筆の類、あるはさり難き銭などしたる

(一)たよりあら  
 ばいかで都へ  
 つげやらん  
 けふ白河の關  
 は越えぬと  
 (二)松葉集 平兼  
 盛  
 (三)藤原清輔 二  
 條天皇の御代  
 の歌人  
 (四)芭蕉の門人  
 俗稱河合宗五  
 郎 旅行の同  
 伴者なり 實  
 永六年(二二  
 八九年)歿年  
 六十二  
 (五)磐城岩代を流  
 る大河  
 (六)磐梯山のこ  
 と  
 (七)磐城國石城  
 郡  
 (八)同相馬郡  
 (九)同田村郡  
 (十)岩代國岩瀬  
 郡 子石と須  
 賀川との間に  
 ある新田  
 (十一)岩代國岩瀬  
 郡

は、さすがに打捨て難くて、路次の煩となれるこそわりなけれ。  
 心もとなき日數重るまゝに、白河の關にかゝりて旅心定まりぬ。  
 (一)いかで都へと便求めしも理なり。中にもこの關は風騒の人、心をと  
 どむ。秋風を耳に残し、紅葉を俤にして、青葉の梢なほあはれなり。卯  
 の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にも越ゆる心地ぞする。古人  
 冠を正し、衣裳を改めし事など、清輔の筆にもとゞめ置かれしとぞ。  
 卯の花をかざしに關の晴着かな  
 (二) 會津嶺高く、右  
 とかくして越えゆくまゝに、阿武隈川を渡る。左に會津嶺高く、右  
 に岩城、相馬、三春の莊、常陸、下野の地をさかひて、山づらなるかげ沼  
 といふ所を行くに、けふは空くもりて物影うつらず、須賀川の驛に  
 等躬といふ者を尋ねて、四五日とゞめらる。まづ白河の關いかに越  
 えつるやと問はる。長途の苦み、身心疲れ、且は風景に魂うばはれ、懐  
 舊に腸を斷ちて、はかしくしう思ひめぐらさず。

風流のはじめや奥の田植歌。

一一 奥の細道 その二



船をかりて松島に渡る。その  
 間二里餘、雄島の磯に着く。  
 抑、ことふりにたれど、松島は  
 扶桑第一の好風にして、凡そ洞  
 庭、西湖に耻ぢず。東南より海を  
 入れて、江の中三里、浙江の潮を  
 湛ふ。島々の數を盡して、そばだ  
 つものは天を指し、伏すものは  
 波に匍匐ふ。或は二重にかさなり、三重に疊みて、左に別れ、右に連る。  
 負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の綠濃に、枝葉汐風

ことふりに  
たれど

(一)支那浙江省に  
 在り。一名錢  
 塘江。海潮の  
 奇を以て知ら  
 る。

に吹撓められて、屈曲自ら撓めたるが如し。千早振神代の昔、大山祇のなせる業にや、造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ、詞を盡さん。

雄島が磯は地續にて、海に出てたる島なり。雲居禪師の別室の跡、

層のあつち又改ひは上りつゝ  
おれし雲ひきき二夜をうらつて  
そのゆゑに松をたもてあや  
あつち心たのせふん

松をたもてあやあつち心たのせふん

予ハ口をとりて眠らんとしていねら  
原安適松がうらしまの和歌を贈らる。袋  
を解きて今宵の友とす。かつ杉風濁子が  
發句あり。

共角筆奥の細道

座禪石などあり。松の木蔭に世を厭ふ人も稀々見えて、落穂、松かさなど打煙りたる草の庵開かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、まづ懐かしくたゞむほどに、月海に映りて、晝の眺また改りぬ。江上に歸りて宿を求め、風雲の中に旅寝するこそ、怪しきまで妙なる心地はせらるれ。

風雲の中に旅寝す

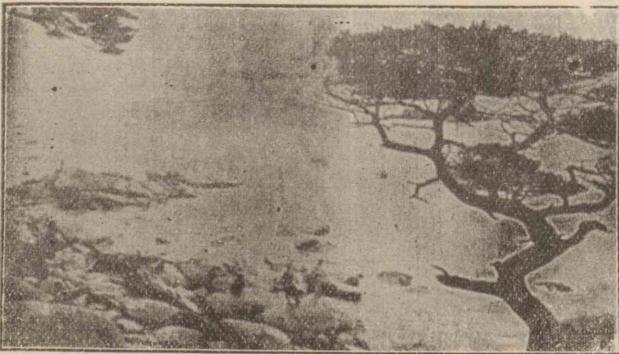
松島や鶴に身をかれほとゝぎす

曾良

(一)山口素堂。俳人、享保元年(一七二六年)歿。年七十五。  
(二)醫者。芭蕉の友人。芭蕉の門人。享保十七年(一七四二年)歿。年八十六。  
(三)鯉屋杉風。芭蕉の門人。享保十七年(一七四二年)歿。年八十六。  
(四)芭蕉の門人。  
(五)陸中國西磐井郡。北上川東を流る。

余は口をとぢて、眠らんとしていねられず。舊庵を別るゝ時、素堂松島の詩あり。原安適松がうらしまの和歌を贈らる。袋を解きて今宵の友とす。かつ杉風濁子が發句あり。

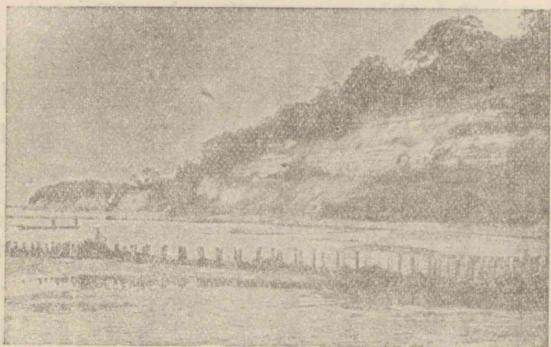
十二日、平泉へと志す。聞傳へたる姉齒の松、緒絶の橋など人跡稀に、雉兔芻蕘の往きかふ道、そこともわかず。終に道ふみ違へて、石の巻といふ湊に出づ。黄金花咲く。と詠みて奉りたる金華山海上に見渡され、數百の廻船入江に集ひ、人家地を争ひて、竈の煙立續きたり。思ひかけずかゝる處にも來れるかなと、宿



金華山の麓(岩子の龜)

(六)陸前國牡鹿郡の町。  
(七)すめらぎの御代榮えんとあづまなる、みちのく山にこがね花さく。(萬葉集)

- (一)陸前國桃生郡橋浦村。
- (二)同牡鹿郡稻生村の字。
- (三)同上。
- (四)陸前國登米郡新田村新田沼。
- (五)同郡登米町。
- (六)藤原清衡、基衡、秀衡。
- (七)平泉館址。奥の御館。
- (八)秀衡作れる平泉鎮護の山。富雄山に擬し雌雄の金鶏を山上に埋む。
- (九)衣川館。義經の居館。
- (一〇)泉三郎忠衡の居館。
- (一一)功名一時の叢となる。
- (一二)國破山河在。城春草木深。(杜甫)

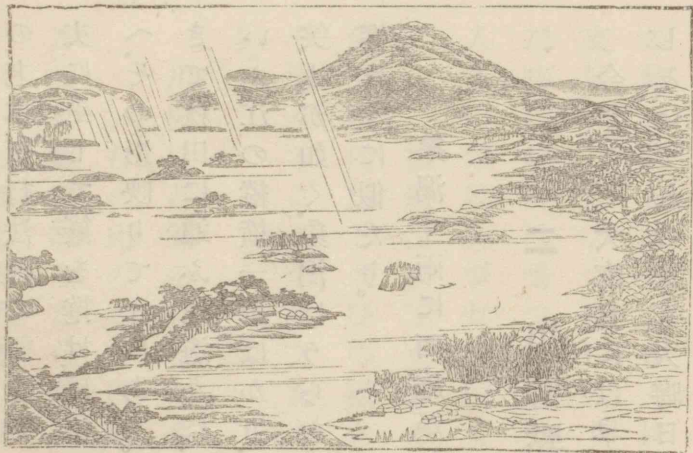


からんとすれど、更に宿かす人もなし。漸く貧しき小家に一夜を明かして、明くれば又知らぬ道迷ひ行く。袖の渡、尾駿(一)の牧、眞野(二)の萱原などよそめに見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼(四)にそうて、戸伊摩(五)といふ處に一宿し衣て、平泉(六)に到る。

三代の榮耀一炊の夢にして、大門の跡は一里此方(七)にあり。秀衡(七)が跡は田野になりて、金鶏山(八)のみ形をのこす。まづ高館(九)に上れば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は泉が城を遶りて、高館の下にて大河に落入る。泰衡が舊跡は衣が關を隔てて南部口をさし堅め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣選つてこの城に籠り、功名一時の叢(一〇)となる。國破れて山河あり、城春に

闇中摸索

- (一)羽後國由利郡。鳥海山の西北麓。その海岸はその後文化元年鳥海山の噴火によりて埋没せり。
- (二)羽後國飽海郡の町。



象 鴻 (芭蕉翁繪詞傳挿畫)

して草青みたり。と笠打敷きて、時の移るまで涙を落しぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡  
江山水陸の風光數を盡して、今象(一)  
鴻に方寸を責む。酒田の湊より、東北の方山を越え、磯を傳ひ、砂を踏みて、その間十里、日影稍傾く頃、汐風眞砂を吹上げ、雨濛朧として鳥海の山隱る。闇中に摸索して雨も亦奇なりとせば、雨後の晴色亦頼しと、蟹の苫屋に膝を容れて、雨の霽るゝを待つ。

その朝天よく晴れて、朝日花やかにさし出づる程に、象鴻に舟を浮ぶ。まづ能因島に舟をよせて、三年

(一)きさかたの櫻は波にうづもれて、花の上こぼれあまつり舟(西行法師)  
 (二)陸前國名取郡。陸羽の境。關谷山にあり。關。山。又。羽。後。川。由。利。郡。小。砂。越。ゆ。る。所。と。も。い。ふ。

幽居の跡をとぶらひ、向の岸にあがれば、花の上漕ぐと詠まれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす。寺を干満珠寺といふ。この寺の方丈に坐して簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさへ、その影映りて江にあり。西はむやくの關路を限り、東に堤を築きて、秋田に通ふ道遙かに、海北に構へて、浪打入るゝ處を汐越しといふ。江の縦横一里ばかり、おもかげ松島に通ひて又異なり。松島は笑ふが如く、象潟はうらむが如し。寂しさに悲みを加へて、地勢魂を惱ますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花。

—奥の細道—

一一 川柳點

大晦日

今年こそ大晦日には早く仕事をしまひ、ゆつくりと年を取るべしと、いづれの家も大晦日にはその心掛をなせども、何がさて一年

(一)吹くからに秋の草木のしをるれば、むべ山嵐を嵐といふらん。(古今集、文屋康秀)  
 (二)人には告げよあまのつりぶね。  
 (三)人目も草もかれぬとおもへば。

の終の日とて、せつかくに外向の用を済ませば、家内の用向、元日の支度に、とう／＼夜に入りて、大騒のうち、舊年、新年の境目なる十二時の時計は鳴つて、舊年の終の事を爲しつゝ、はやすでに新年に入るの類は、いづれの家も珍しからぬと見え、古き川柳にも、

据風呂に下女があるうち春になり

蓋し、家内總じまひの殿として、下女が風呂に入る頃は、はや十二時を過ぐることに見えたり。昔も今も變らぬものはこれ等の有様なり。

川柳ほど氣の利きたるものはなし。

むべ山のなかに嵐の年始客

これも實際ありさうなることなり。又曰く、

歌がるた人といふ字に手が五つ

これ等も昔の句ながら、今も同様、カルタの句の頭字の人といへる



「人に知られ  
て来るよしも  
がな。」  
「人のいのち  
の惜しくもあ  
るかな。」  
「人知れずこ  
そおもひそめ  
しか。」  
「人こそ見え  
ね秋は來にけ  
り。」  
「人をも身を  
もちらみざら  
まし。」  
「人づてなら  
でいふよしも  
がな。」  
「人こそ知ら  
ねかく間も  
なし。」  
以上百人一首  
中の下の句あ  
る頭に人の字あ

には、五つどころか、一時に十の手も出づべし。又曰く、  
一日の御慶炬燵へ取りよせる  
且那樣歸宅の後、夜分に入り、どれ／＼新年の名刺を持って來よ。」と言  
ふは、いづれの家も似たるものなるべし。又曰く、  
上るなど言はぬばかりの帳を出し  
これは、今の若き人には分らぬかも知れず。今ならば左の如く言ふ  
を可とす。  
上るなど言はぬばかりの箱を出し  
これは、名刺入れの箱と知るべし。又曰く、  
嫁の出るまではまだるい歌がるた  
佳興に入る頃は、若き嫁さんまで一座に飛入る。カルタの花の盛な  
るべし。又曰く、  
れんじに同居駒下駄と福壽草

う  
コンノサ  
サ  
ハ  
ヤ

(一)支那の王。姓  
は姫、名は昌。  
太公望を渭水  
の邊に得て、國  
を盛にす。

(二)源三位頼政の  
家來、猪俣太。

これも町家の狭き處には、往々見掛くる實景なり。  
凡そ川柳は、突如として來り、初よりその題を言はぬところに妙  
味あり。

芭蕉は飛びこみ道風は飛上り  
若しこの句の前に題を蛙と書きたらんには、興味薄かるべし。その  
出しぬけなるところ面白し。

釣れますかなどと文王そばへ寄り  
釣などもししてみる馬鹿な軍學者  
の如き有名なる句も、その突如として出づるところに妙あり。

常に文王が來るとは限らず。太公望氣どりの軍學者も困りものな  
り。

その暗さ隼太櫻につきあたり  
まさかに暗しとて、紫宸殿の大庭の櫻に突當るほどにもあるまじ

けれども、何がなしにをかし。  
 右の諸句は、川柳として品のよき方なり。若しその秀逸と稱せらるゝものを數ふれば、多くは品あしく、士君子の間に語り難きもののみ。その愈、品あしきものほど、その特色益、著し。  
 若し川柳をして今少し品よきものならしめば、蓋し詩歌中の珍ならん。

— 矢野文雄の文による —

一三 銀の猫

上田 秋成

文治それの年の秋八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に詣でさせ給ふ。例の事にて、御供仕うまつる人々、御前追ひ、御後べ仕うまつれる、潜に遊ぶ蘆鶴の歩みして、疾からず遅からず、列を亂さず練りいでさせ給へるを、大路に膝折りふせ、畏み奉る人數多あるに、警衛して、あなとだに言はせず、世にいかめしく尊き御有様なり。

忌垣

ゆくりなし

雲水

おほとなぶら



上田 秋成

返りまをしして、御手輿に召させ給ふほど見留めさせ給ひ、御階の忌垣のもとに畏まり居る法師のあるが、見上げ奉る面つき、旅に飢ゑて、いと瘦黒みづきたるに、衣、杖、笠なども、乞食者のさましたる、なほ人ならずや、思しけん、あの法師が修行するやう、名をも問へ。」と仰せ給ふ。御輿添の若侍急ぎ走り寄りて、ぞ、名をも申せ。」といふ。ゆくりなきに驚きたるさまして、雲水に在處定めず侍る者にて、名は圓位と申す。」といふ。聞し召されて、さればこそ聞知りたれ。穴熊の猛き獲物の類ならで、賢き人得たる例に誘ひ歸らん。わが後につきて來れといへ。」とて、召連れさせ給へり。  
 御館に入らせ、御装束改めさせ給へば、やがておほとなぶら數多

簀子  
菟姑射の山

月花の譽

伊勢の海

千尋の淵

今に貝

あつた

照らしかゝげたり。けふの道行づとゐてこ。と仰せ給ふ。法師まるれ。とて、御座近き簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、昔は菟姑射の山の御宮仕せし人の世をはかなきものに思ししみて、身は黒くやつしたれど、月花の譽は物の心なきあづま人さへ聞知りたるぞ。八百日ゆく瀆の眞砂の中には、玉とて拾ひ収めたらんを、語りて聞かせよ。仰せ給ふ。

「いとも輝かしきにぞ、たゞ夢路をたどるやうに侍りて、聞え奉るべき事も侍らず。さとき御眼に見現されて侍ること、いとも有難けれ。伊勢の海千尋の瀆におり立ちならひ侍れど、かひあることも打出で侍らぬには、これとて捧げ奉るべくもあらず。君にもかねて學ばせ給ふとも漏りきゝ奉る。天の下まつりごち給ふ御器物の大いなるに思し寄せ給ふには、かけても及ぶまじきをさへ思し知り侍る。大空に羽打ちつけて飛ぶ鶴の聲、霜枯の淺茅が下の蟲の音、い

かて取りなめて聞ゆべき。あな畏し。」と申す。

打笑ませ給ひ、弓取りし人のもと心の猛きには、詠む歌も直く明らさまにと聞くは實か。歌は武士の荒々しき心には詠み得まじきものに、宮人たちは沙汰し給へりとや。軍に出立ちて、笛、鼓の音、馬の嘶は物とも思はぬを、この三十字餘りの學には心の後るゝはいかに。「こは畏き御心にも思し惑はせ給ふものか。古の代々の帝は、馬に鞍おき御弓矢取らして御軍に立たせ給ひし。その御歌を讀み見奉れば、猛く直々し、調もいと高しとこそ聞きわたり侍れ。いでや歌よまんとては、ますらを心をとりに隠し、あてになよびかのみ詠みいでまくするこそ、この道のいみじき煩なれ。君がさとく猛き御心のまゝに打ちまねばせ給はんには、今の世の人誰かは並びあひ奉らん。三尺の劔を取りて、大風起り雲飛揚す。」と歌ひ、槊を横たへて、<sup>(二)</sup>烏鵲南に」と詠ぜし君たちは、鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや。

あて  
なよびか

(一)漢の高祖の  
作「大風起兮  
雲飛揚威加三  
海内兮歸二放  
鄉。安得二猛  
方二守二四  
(二)魏の曹操の  
作。

玉造等がいみじく磨りみがきたるも、染殿のやしほの色も、はかな  
き目移りばかりは何にかは。されど谷深き鶯の聲、信濃路出づる荒  
駒の歩み、いづれの道、いづれの業にも、初より優れたらんは鬼にこ  
そ侍らめ。といふ。

「人々あれ聞き給へ。世は捨てのがるとも、頼しき人の心ならずや。  
圓位よ。圓位よ。汝が遠つ祖の秀郷(一)といひしは、世にいみじき弓の上  
手となん聞ゆる。傳へたる事もあるべし。かくこそと思ひしみぬる  
事は忘れずてぞあらん。事一言にても教へ承らばや。」こは益、恐ある  
御問はせなり。御物語のはては、武士の道しほしも怠らせ給は  
ぬ御心より、野山を住處の瘦法師にだに問はせ給ふことの忝さよ。  
向ひ奉りては、をこがましく、何をかは家の傳はりなどとして聞え奉  
るべき。まして有難き大宮仕を否み奉り、親たちの慈みをさへあだ  
なるものに思ひなして、年僅かに二十三にして家を出でたるいた

(一)藤原秀郷。田原藤太と稱す。鎮守將軍となる。

をこがまし

づら者の、弦ひかんすべだに心にもとゞめ侍らず。たゞ一言の忘れ  
難きは、賞を重くし罰を軽くせよといひしと、任ずるものを辱しむ  
れば危しといひし事とのみ。病める士卒の疽をすひしは人の心を  
よく買ひなすと雖も、眞の情よりとも覺え侍らず。竈を減じて人を  
危きに陥るゝは、將帥のさかしきにて、國を治め天の下を知るべき  
君の御心にあらず。さはれ、軍を出し給へることの怪しきまで賢く  
おはするを餘所ながら聞き侍るには、この方の御問、免させ給へ。」と  
て、額を板敷に擦りつけて申す。

君笑みほこらせ給ひ、口とく、心さかしき法師なり。今宵は月見る  
夜ぞ。人々と土器取りはやし、曉かけて遊ばん。まらうどは酒飲まさ  
るべし。鹿、猿の中に立交りて歌詠めといふとも、詠むまじ。たゞ我が  
前にて遊べ。飽かず飲み、物きたなげに食ひちらす人々は、暖にこそ  
風ひややかなるに、この火取りて法師に參らせよ。」とて、白銀をもて

作れる猫の形したるを取傳へて、君より賜はず。とて、前に置きたり。



菊池容齋筆

「鹿、猿はなほ心猛し。鼠をだにえ捕らぬ。瘦法師がためには、げに似つかはしき御賜ぞ。」とて、三度押戴きて、翌朝御暇賜はりて立出づるに、御館の人やどりに誰人の童ならん、括袴くくりばかまの裾朝露に濡れそぼちて、いと寒げに居るを見て、これ取らせん。火埋みして手足をあたゝめよ。とて、かのきら／＼しき物を與へて、願もせて立去りぬ。

童打驚きて「これ見給へ。見も知らぬ法師の見も知らぬ物賜ひつ

青侍

あなづらは

るは。とて青侍に見すれば、目口をはだけ、かく尊き寶物を誰かは得させん。拾ひやしつる。」といふ。さらに更に、道のそらにかゝる物やはあるべき。あな恐し。殿に奉りて給へ。」といふ。やがて御館にもて参り、仕ふる君を呼びいでて、しか／＼の事なんと申す。いと怪し。大將殿の法師に賜ひしを、いかで童には得させけん。訝し。とて、まづ急ぎて聞え奉る。君打笑み給ひ、かの似而非法師、あなづらはしく幼げなるものくれしとて、腹立たしくや思ひけん。わが門の前に捨てゆきつるよ。一度似而非者の手に穢れしもの、その童に取らせよ。とて、取りおろさせ給ひぬ。

西行後にこの事を人に語りていふ、右府は寔にねぢけたる君なり。口に蜜あれど、心には針のおはすらん。漢高の大度、曹孟徳の智略あるに似て、天下の人、皆この君の網の中に入れられたるは、佛の冥福といふことを生まれ得給ひけん。たゞ悲しむべきは、神の御齋の、

この後やうく、衰へさせ給はん世の姿なるは。とて、涙とゞめ難くして物がたりしとなん。心なき身にもこれを聞傳へては、秋の夕暮ならずとも、打撃みぬべし。

— 藤妻冊子 —

一四 長谷寺詣

幸田露伴

弓張月のやうく、光りて、入相の鐘の音も収る頃、西行は長谷寺に着きけるが、問ひおどろかすべき法の友のなきにはあらねど、問ひも寄らて、観音堂に参り上りぬ。さなきだに梢透きたる樹々をなぶりて、夜の嵐の誘へば、はらくと散る紅葉なんどの空に狂ひて吹入れられつ、法衣の袖にかゝるもあはれに、また佛前の御燈明の瞬しつ、萬般の物の黒み渡れるが中にいと幽なる光を放つも趣あり。法華經の品第二十五を聲低う誦するに、何となく平時よりは心も締りて、身に浸渡る思のすれば、なほ誠を籠めて誦し行くに、天

(一)奈良縣磯城郡初瀬町。今は眞言宗豊山派の總本山。

(二)法華經普門品第二十五卷は觀音經なり。

隨喜

も静けく地も静けく、人も全く静まりたる、時といひ、處といひ相應して、我が耳に入るは我が聲ながら、若しくは隨喜佛法の鬼神などの、聲を和せてともに誦するかと疑はるゝまで、上なく殊勝に聞え



渡りぬ。特に参りたるかひはあり長けり。菩薩も定めしかゝる折の山谷かる所作をば善しとして、必ず納寺受し給ふなるべし。今宵の心の澄全切りたる、この清しさを何に比べ景ん。餘りに有難くも尊く覺ゆれば、今宵は夜すがら、この御堂の片隅

趺坐

になり趺坐して、曉方になほ一度誦經し参らせて、さてその後香華をも淨水をも供して罷らん。と、西行やがて三拜して、御佛の御前を少し退り、影暗き一隅に身をねぢ据ゑ、凍れる水か、枯れし木の、動き

與坐

所化

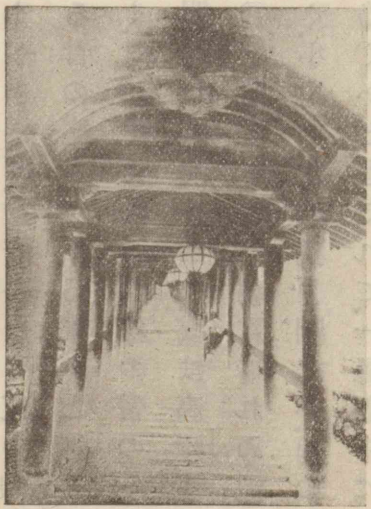
僧形

もせねば、音も立てず、寂然として坐し居たり。夜は沈々と漸く更けて、風も睡れる如くになりぬ。右左に並びて立ちたりける御燈明は、一つ消え、又一つ消えぬ。今はたゞいと高き吊燈籠の光朦朧として力なきが、夢の如くに残れるのみ。この寺の僧どもは寒氣に怯ちて、所化寮に爐をや圍みてあるらん、影だに終に見する者なし。いふべき方もなく、静かなれば、日比焼きたる餘氣なるべし、今薫ゆるとにはあらぬ香の、あるかなきかに自ら匂を流すも、いとよく知らる。かゝるをりから、何者にか此方を指して來る足音す。御佛に仕ふるこの寺の者の燈燭をつぎ參らせんとて來るにやと打見るに、御堂の外は月の光白々として、霜の置けるが如くに見ゆるが中を、寒さに堪へてや、頭には何やらん打被きたれど、正しく僧形したるが歩み寄るさまなり。心を留むとはあらざれど、何としもなくなほ見てあるに、やがて月の及ばぬ闇の方へ身を

高さは高し  
互の程は隔  
りたり

菩提の道の  
友  
淺ま

入れたれば、定かには知れぬながら、この御堂に打向ひて、一度はまづ拜み奉り、さて静々と上り來りぬ。御堂は狭からぬに、燈は螢ほどなり。燈の高さは高し。互の程は隔りたり。此方を彼方はありとも知らず。彼方を此方はよくも見得ねば、西行はたゞ我と同じき心の人も亦ありけるよと思ふのみにてうち過ぎたり。彼方はもとより闇の中に人ある事を知らざれば、何に心を置くべくもなく、御佛の前に進み出でつ。いとつゝましげに畏まりて、數多度合掌禮拜し、一心の誠を致すと見ゆ。同じ菩提の道の友なり。その心操の淺まならぬも、夜深の參詣に測り得たり。衣の色さへ辨ち得ざれば、面はまして見るべくはなけれど、淨土の同行



長谷寺廻廊

卒爾

の人なるものを呼掛けて語らばや、名をも問はばやと、西行は胸に思ひけるが、卒爾に物言はんは悪しかるべし。祈願の終つてのちにこそと、心を控へて窺ふに、彼方は珠數を取出し、さやくとばかりすり始めたり。針の落つる音も聞くべきまで、物靜かなる夜の御堂の眞中に在りて、水精の珠數を擦る音の亮らかなる響いと、牙えて神々し。御經は心に誦すとおほしく、萬籟絶えたるに、珠の音のみをたゞ緩やかに響かす。その音、或は明らか、或は幽に、或は高く、或は低く、寢覺の枕の半ばは夢に霞の音を聞くが如く、朝霧晴れぬ池の面に、菡萏の急に開くを聞くが如く、小川の水の獨り咽ぶか、雨の紫竹の友ずれか、山吹匂ふ山川の蛙鳴くかと過たれて、一聲聲中に萬法あり、皆與實相不相違背と、いとをかしくも聞きなされるれば、西行感に入つてありけるが、期したるほどの事は仕果てしにや、その人珠數を収めて、御佛をば禮拜すること數多度しつ、やをら身を起し

萬籟

萬法

しどろもど

て退らんとす。菩提の善友、淨土の同行、契をこの上に結ばんには、今こそ言葉を懸くべけれど、思ひ入りて擦る珠數の音の聲澄みて、おぼえずたまる我が涙かなと、歌の調は好かれ、悪しかれ、西行俄に詠みかくなれば、彼方は始めて人あるを知り、思ひかけぬに驚きしが、何と仰せられしぞ。今一度と、心を押鎮めて問ひかへす。聞きとりかねけんとするするまゝ、思ひ入りて擦る珠數の音の聲澄みて、と再び言へば、後は言はせず、君にておはせしよ。こはいかに、と涙にふるふおろく、聲、言葉の文もしどろもどろに、身を投伏して取附きたるは、聲音に紛ふかたもなきその昔の我が妻にぞありける。

—二日物語—



うたかた

蕘をあらそふ

無常を争ひ去る

一五 方丈の室

鴨 長 明

行く川の流は絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、且消え、且結びて、久しくとゞまることなし。

世の中にある人とすみかと亦かくのごとし。玉しきの都のうち、に軒をならべ、蕘をあらそへる、たかきいやしき人のすまひは、代々を経て盡きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて、今年造り、あるは大家滅びて、小家となる。住む人もこれに同じ。所も變らず、人も多かれど、昔見し人は、二三十人が中に、僅かに一人二人なり。朝に死し、夕に生まるゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生まれ死ぬる人、何方より來りて、何方へか去る。又知らず、假の宿り誰が爲に心を惱まし、何によりてか目を悦ばしむる。そのあるじと住家と、無常を争ひ去るさま、

いはば朝顔の露に異ならず。あるは露おちて、花残り、残るといへども朝日に枯れぬ。或は花凋みて、露なほ消えず、消えずといへども夕を待つことなし。



鴨 長 明

わが身父方の祖母の家を傳へて、久しく彼の所に住む。その後、縁かけ身衰へて、忍ぶ方々しげかりしかば、遂に跡とむることを得ずして、三十餘にして更に我が心と一つの庵を結ぶ。これをありし住居にならずらふるに、十分が一なり。たゞ居屋ばかりを構へて、はかしくは屋を作るに及ばず。わづかについぢをつけりといへども、門たつるにたづきなし。竹を柱として車やどりとせり。雪降り風吹くごとに、危からずしもあらず。所は川原近ければ、水の難深く、白波の恐もさわがし。すべてあらぬ世を念じす

(一)「住みわびて我さへ軒のしのぶふかた」しげき宿かな。(金葉集、周防内侍)

(二)高倉天皇の晩年。安元、治承の頃。

たづき (三)賀茂の川原。

(一)長明が五十歳の春、後鳥羽天皇の建久の頃。  
 (二)一名小鹽山。山城國乙訓郡の西。

(三)土御門天皇建永の頃。

ぐしつゝ、心を悩ませることは、三十餘年なり。その間折々のたがひめに、おのづから短き運をさとりぬ。乃ち五十の春を迎へて、家を出て世をそむけり。もとより妻子なければ、捨てがたきよすがもなし。身に官祿あらず、何につけてか執をとゞめん。空しく大原山の雲に、いくそばくの春をか經ぬる。

ここに六十の露消えがたに及びて、更に末葉の宿りを結べる事あり。いはば旅人の一夜の宿を作り、老いたる蠶の繭を營むが如し。これを中頃のすみかにならずらふれば、又百分の一にだも及ばず。とかくいふほどに、齡は年々に傾き、住家は折々にせばし。その家の有様よの常にも似ず。廣さは僅かに方丈、高さは七尺ばかりなり。所を思ひ定めざるが故に、地をしめて作らず。土居をくみ、打覆をふきて、つぎめ毎にかけがねをかけた。若し心にかなはぬ事あらば、易く外に移さんが爲なり。その改め作る時、いくばくの煩かある。積むと

(一)山城國宇治郡木幡山の東北なる日野山の麓。

(二)宇治郡高が嶺の北。俗に關山といふ。木幡山の北に關ありとぞ。  
 (三)紀伊郡にあたり。鳥羽も同乙訓郡。



ころ僅かに二輛なり、車の力をむくゆる外は、更に他の用途いらす。

また麓(一)にひとつの柴の庵あり。すなはちこの山守が居る所なり。かしこに小童あり、時々來りてあひ訪ふ。若しつれなる時は、これを友として遊びあり。かれは十六歳、われは六十。その齡ことの外なれど、心を慰むることはこれ同じ。或はつばなを抜き、岩なしを採る。又ぬかごをもち、芹を摘む。或はすそわの田におりて、落穂を拾ひてほぐみを作る。若し日うらゝかなれば、嶺に攀上りて、遙かに故郷の空を望み、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるにさはりなし。あゆみわづらひなく、志とほくいたる時

(一) 宇治の御室戸山の東北方。  
 (二) 宇治の醜御山の東方。  
 (三) 近江國滋賀郡石山も栗津も同郡。  
 (四) 近江國栗太郡。宇治の川上。  
 (五) 百人一首中の歌人。年代不詳。  
 (六) 山城國久世郡。宇治川の西にあたる。  
 (七) 山鳥のほろほると、く聲聞けば、母かと思ふ。  
 (八) 玉葉集、行基(善陸) 一いふ事もなき埋火をおこなせぬ、冬かねがめの友しなれば。  
 (堀川百首、藤原國信)

は、これより嶺つゞき炭山を越え、笠取を過ぎて、岩間に詣て、石山を拜む。若しはまた栗津の原を分けて、蟬丸の翁が跡をとぶらひ、田上川を渡りて、猿丸大夫が墓をたづね、歸るさには折につけつゝ、櫻を狩り、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、かつは佛に奉り、かつは家づとにす。若し夜靜かなれば、窓の月に古人をしのび、猿の聲に袖をうるほす。叢の螢は遠く眞木の島の篝火にまがひ、曉の雨は自ら木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろくと啼くを聞きて、父か母かと疑ひ、峯のかせきの近く馴れたるにつけても、世に遠ざかる程を知る。或は埋火をかきおこして、老の寢覺の友とす。おそろしき山ならねど、ふくろふの聲をあはれぶにつけても、山中の景氣折につけて盡くることなし。

自修文

一七 孔子の故郷

澁川玄耳

—方丈記—



孔子  
 (藏館物博ントスポ)

—狩野探幽筆—

山鳥のほろほると、く聲聞けば、母かと思ふ。  
 玉葉集、行基

(一)孔子を祀つた廟。

柏  
ひのき類。

石欄  
石で造つた手すり。

渴仰者

心からあふぎしたふもの。

(二)支那宋代の學者。明道先生といふ。

讀了

よんでしまふ。

全然事なきもの。全く感じないもの。

(一)大成殿參拜に出かける。四時過ぎてゐる。もはや暮れるに間がない。大きな門を入ると廣場がある。右に大きな邸宅がある。その隣が即ち聖廟である。

境内は柏が天を蔽ひ、莊嚴な樓閣殿堂が相連つてゐる。その石柱の如きは、ギリシヤ、ローマの建築に比して譲るところがない。その巨大な點に於ても、柱を捲く雙龍の彫刻の意匠技能に於ても、亦支那美術の誇である。と聞いてゐたが、成程さうだらうと驚歎して、柱を撫でまはして見た。忙しい中に案内人は傍の石欄の柱を平手で敲いて余を招く。何かと訊けば、黙つて又敲く。奇なるかな、例へば釣鐘を平手で敲いたやうに、金屬のやうな響がする。余は賢しげに外に二三本の石柱を試みたが、一個もそんな響はない。皆頑然たる石の音、いたづらに掌が痛かつた。

孔子に對する渴仰者には幾種類かある。程子曰く、「論語を讀むに、讀了の後全然事なきものあり。讀了の後その中の一兩句を得

國教

國家が國民の  
信奉すべきも  
のと認めた宗  
教。

(一) 支那山東省  
州府の縣。

(二) Jerusalem.

アジヤトルコ  
の西南部シリ  
ヤの地中海地  
方なるパレス  
タインの都。  
キリストの墓  
がある。

(三) Mecca.

アラビヤの首  
府。マホメツ  
トの墓があ  
る。

達人

もの事の道理  
によく通じた  
人。

て喜ぶものあり。讀了の後これを好むことを知るものあり。讀了  
の後直ちに手の舞ひ足の踏むところを知らざるものあり。と。こ  
の最後の歡喜者が眞に渴仰信心の輩である。

支那は歴代概ね試験を以て官を採つた。支那の試験には儒學  
の知識が基礎であつた。随つて支那に於ける孔子教の勢力は、一  
面に於て法制の力を假りて普及したと謂つてよい。これに加へ  
て、歴朝の帝王が政略的に尊敬を加へたので、孔子は國教的本尊  
となり、曲阜は支那のエルサレム、メッカとなつた。そしてその殿  
堂樓閣は、全く宗教的に莊嚴を極めてゐるのである。

孔子廟は孔子の住家の跡に建てたものと傳へられてゐる。境  
内に種々な遺跡がある。杏壇といふのは、孔子がその門徒に教を  
説いた處ださうな。孔子手植の柏といふのもある。

孔子は屢、餓死に瀕したことがあつた。達人は當時に容れられ  
ないものに定まつてゐる。幾度か仕官して、幾度か免職になつて

遊説

四方にとさま  
はること。

天成

自然になつ  
た。うまれつ  
きもつてゐる  
こと。

シテ 天人  
ツレ 漁夫

(一) 三保とも書

水港の南に突  
出せる松原。

「風早の三穂  
の浦曲をこぐ  
舟の、船人さ  
わぐ波たつら  
しも。」(萬葉  
集卷七、作者  
不詳)

(二) 千里好山雲  
乍斂。一樓明  
月雨初晴。

(三) 詩人玉屑に  
見ゆ。

る。彼は失意の境に在つて修養したものらしい。その再び出て  
仕へたのは、五十を過ぎてからである。工部大臣となり、司法大臣  
となり、總理大臣心得となつたが、やり過ぎて失敗した。爾來どう  
にかして志を行はうと、十數年間諸侯に遊説したけれども、遂に  
大いに用ひられる機會がなくて、子弟とともに専ら詩書を講ず  
ることになつた。しかしその全く仕官に念を斷つたのは、六十八  
の歳である。余は孔子を天成の聖人とは思はない。修養の人、努力  
の人、精力の人として尊敬するのである。

— 小敵大敵 —

一七 羽衣 — 謠曲

ワキ一聲「風早の三穂の浦曲をこぐ船の、浦人さわぐ浪路かな。」

サシ「これは三保の松原に、白龍とまをす漁夫にて候。ツレ、萬里の  
高山に、雲忽ちに起り、一樓の明月に、雨はじめて晴れたり。げにのど

(一)「忘れずよ清  
見が關の波間  
より霞みて  
見えし三保の  
浦松。」(續古  
今集、中務卿)

(二)風むかふ雲  
のうき波たつ  
と見て釣せ  
ぬさきに歸る  
舟人。(藤原  
爲相)

かなる時しもや春のけしき松ばらの浪たち續く朝霞月ものこり  
の天の原およびなき身のながめにも心空なる景色かな。歌<sup>(一)</sup>忘れ

早<sup>はや</sup>上<sup>うへ</sup>の<sup>う</sup>三<sup>さん</sup>保<sup>ぼ</sup>の<sup>の</sup>浦<sup>うら</sup>曲<sup>まが</sup>を<sup>を</sup>傳<sup>つた</sup>ぐ<sup>く</sup>船<sup>ふね</sup>の<sup>の</sup>  
浦<sup>うら</sup>人<sup>びと</sup>騒<sup>さわ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>波<sup>なみ</sup>路<sup>ぢ</sup>か<sup>か</sup>を<sup>を</sup>引<sup>ひ</sup>く<sup>く</sup>三<sup>さん</sup>保<sup>ぼ</sup>  
の<sup>の</sup>松<sup>まつ</sup>原<sup>はら</sup>に<sup>に</sup>白<sup>しろ</sup>龍<sup>りゆう</sup>と<sup>と</sup>申<sup>まを</sup>す<sup>す</sup>漁<sup>いし</sup>夫<sup>つま</sup>あて  
の<sup>の</sup>方<sup>かた</sup>里<sup>さと</sup>の<sup>の</sup>好<sup>この</sup>み<sup>み</sup>は<sup>は</sup>雲<sup>くも</sup>忽<sup>たち</sup>ち<sup>ち</sup>起<sup>た</sup>り<sup>り</sup>  
一<sup>いつ</sup>樓<sup>ろう</sup>の<sup>の</sup>月<sup>つき</sup>は<sup>は</sup>雨<sup>あめ</sup>降<sup>ふ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>晴<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>り<sup>り</sup>  
け<sup>け</sup>に<sup>に</sup>長<sup>なが</sup>閑<sup>かん</sup>か<sup>か</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>時<sup>とき</sup>も<sup>も</sup>や<sup>や</sup>春<sup>はる</sup>の<sup>の</sup>

くものどけき朝風の松は常磐の聲ぞかし浪は音なき朝なぎに釣  
人おほき小舟かな。ワキ詞われ三保の松原にাগり浦の景色をな

本 論  
めや山路をわけ  
て清見瀉遙かに  
三保の松原にた  
ちつれいざや通  
はん。風向<sup>(二)</sup>ふ雲の  
うき浪たつと見  
て釣せて人やか  
へるらん待てし  
ばし春ならば吹

虚空

ところに虚空に花ふり音楽聞え靈香<sup>れいこう</sup>四方に薫ず。これたゞ事と思  
はぬところに、これなる松に、美しき衣かゝれり。よりに見れば、色香  
妙にして、常の衣にあらず。いかさま取りて歸り、古き人にも見せ、家  
の寶となさばやと存候。

シテ詞「なう、その衣はこなたのにて候。何しに召され候ぞ。ワキ詞」こ  
れは拾ひたる衣にて候ほどに、取りて歸候よ。シテ「それは天人の羽  
衣とて、たやすく人間に與ふべきものに非ず。もとの如くにおき給  
へ。ワキ」そもこの衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さも  
あらば、末世の奇特に留めおき、國の寶となすべきなり。衣を返すこ  
とあるまじ。シテ「悲しやな、羽衣なくては飛行のみちも絶え、天上に  
還らんこともかなふまじ。さりとは返したび給へ。ワキ」この御詞  
を聞くよりも、愈、白龍力を得、もとよりこの身は心なき、天の羽衣取  
りかくし、かなふまじとて立ちのけば、シテ「今はさながら天人も、羽

とやあらん  
かくやあらん

天人の五衰

(一)は頭上天花  
忽萎。二は天  
衣塵垢所著。  
三は腋下汗  
出。四は面目  
數胸。五は不  
樂本馬。

なき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし。ワキ、地にまた住めば  
下界なり。シテ、とやあらん、かくやあらんと悲しめど、ワキ、白龍衣を  
返さねば、シテ、力及ばず、ワキ、せんかたも、地、涙の露の玉鬢、かざし  
の花もしをくと、天人の五衰も目の前に見えて、あさましや。  
シテ、天の原、ふりさけ見れば霞立つ、雲路まどひてゆくへ知らず  
も。地、住馴れし、空にいつしかゆく雲の、うらやましき景色かな。迦  
陵頻伽のなれくし、聲今さらにわづかなる、雁が音の歸りゆく、天  
路をきけばなつかしや。千鳥、鷗の沖つ浪、行くか歸るか春風の、空に  
吹くまでなつかしや。

ワキ詞「いかに申候。御姿を見奉れば、餘りに御痛はしく候ほどに、  
衣を返し申さうずるにて候。シテ詞「あらうれしや、こなたへ賜はり  
候へ。ワキ「しばらく承り及びたる天人の舞樂、たゞ今ここにて奏し  
給はば、衣を返し申すべし。シテ「うれしや、さては天上に還らんこと

疑は人間に  
あり

霓裳羽衣の  
曲



なし、ワキ「天の羽衣風に和し、シテ「雨にうるほふ花の袖、ワキ「一曲を

を得たり。このよろこびにとてもさ  
らば、人間の御遊のかたみの舞、月宮  
をめぐらす舞曲あり。たゞ今ここに  
て奏しつゝ、世のうき人に傳ふべし。  
さりながら、衣なくてはかなふまじ。  
さりとはまづ返し給へ。ワキ「いや、  
この衣を返しなば、舞曲をなさてそ  
のまゝに、天にやあがり給ふべき。  
能シテ「いや、疑は人間にあり。天に偽な  
きものを。ワキ「あら耻づかしや。さら  
ばとて、羽衣を返し與ふれば、シテ「少  
女は衣を着しつゝ、霓裳羽衣の曲を

とつば

玉斧の修理

(一)君が代は天の羽衣まれにきて、撫つとも盡きぬ巖なるらん。(拾遺集、讀人不知)

奏で、シテ舞ふとかや。地東遊の駿河舞、この時や始なるらん。地「それ久方の天といつば、二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空は限りもなければとて、久方の空とは名附けたり。シテ、サシ「然るに月宮殿のありさま、玉斧の修理とこしなへにして、地「白衣、黒衣の天人の、數を三五に分つて、一月夜々の天少女、奉仕を定め役をなす。シテ、我も數ある天少女、地「月のかつらの身をわけて、かりに東の駿河舞、世に傳へたる曲とかや。クセ、春霞たなびきにけり、久方の、月のかつらも花や咲く。げに花かづら色めくは、春のしるしかや。面白や、天ならで、ここも妙なり天津風、雲の通路吹きとちよ。少女の姿しばしとゞまりて、この松原の春の色を三保がさき、月清見瀉、富士の雪、いづれや春の曙、たぐひ浪も、松風も、のどかなる浦のありさま。その上、天地は何を隔てん玉垣の、内外の神の御末にて、月も曇らぬ日の本や。シテ、君が代は、天の羽衣稀にきて、地「撫つとも盡き

心せまる  
羽衣  
あつた

(二)笙歌遊開孤雲上。聖來迎落日前。(大江定基の詩)  
(三)北は黄に南は青く、東白、西くれなゐにそめいろの山。(紫式部) 本地

(三)愛鷹山。

ぬ巖ぞと、聞くも妙なり東歌、聲そへて、かづくの、箏、笛、琴、篳篥、孤雲の外に、充ち満ちて、落日の紅は、蘇命路の山を寫して、緑は浪に浮島が、拂ふ嵐に花ふりて、げに雪をめぐらす白雲の袖ぞ妙なる。シテ、南無歸命月天子、本地大勢至。地東遊の舞の曲、シテ、ワカ、あるひは天つみ空の緑の衣、地、または春立つ霞の衣、シテ、色香も妙なり少女の裳、地、左右左、さいう颯々の、花をかざしの天の羽袖、なびくもかへすも舞の袖。舞、東遊のかずくに、その名も月の色人は、三五夜中のそらにまた、満願眞如の影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土にこれを施し給ふ。さるほどに時移つて、天の羽衣浦風にたなびきたなびく三保の松原、うき島が雲の、あしたか山や、富士の高嶺かすかになりて、天つみ空の霞に紛れて失せにけり。



一八 小 謠

高 砂

(一)太平之世。五日一風。十日一雨。風不鳴。雨不破。地。王充論衡。

四海浪靜かにて、國もをさまる時つ風、枝をならさぬ御代なれや。あひに相生の、松こそめでたかりけれ。げにやあふぎても、こともおろかやかゝる代に、すめる民とて豊なる、君の恵ぞ有難きく。

熊 野

四條五條の橋の上、老若男女貴賤都鄙、いろめく花衣、袖をつらねて行末の、雲かと思えて八重一重、咲く九重の花盛、名におふ春の景色かなく。

鶴 龜

庭の砂は金銀の、玉をつらねて敷妙の、五百重の錦や瑠璃の扉、磔のゆきげた瑠璃の橋、池の汀の鶴龜は、蓬萊山も餘所ならず、君の

恵ぞ有難きく。

二人 靜

木の芽はる雨ふるとても、なほ消えがたき北野邊の、雪の下なる若菜をば、今幾日ありて摘ままし。春立つといふばかりにや三吉野の、山も霞みて白雪の、消えし跡こそ道となれ。

鞍馬天狗

(一) 花さかば、告げんといひし山里の、使は來たり馬に鞍、くらまの山のうず櫻、手折りしをりをしるべにて、奥も迷はじ咲きつゝく木蔭に並みゐて、いざく花をながめん。

竹生島

(二) 綠樹影しづんで、魚木に上るけしきあり。月海上に浮んでは、兎も波を走るか、面白の浦の景色や。

鉢 木

(三) 綠樹影沈魚上木。清波月落兎奔浪。一休(建長寺僧自休竹生島詩)

(一) 花さかばつげんといひし山人の、來る音すなり馬にくらおけ。(源賴政)

(一) 御垣守衛士のたく火の夜は燃えて、晝は消えつゝ物をこそ思へ。  
(詞花集、犬中因能宣)

松はもとより常磐にて、薪となるもことわりや。切りくべて今ぞ御垣守衛士の焚く火はおためなり。よく寄りてあたり給へや。

一九 今様三題

萬劫年ふる

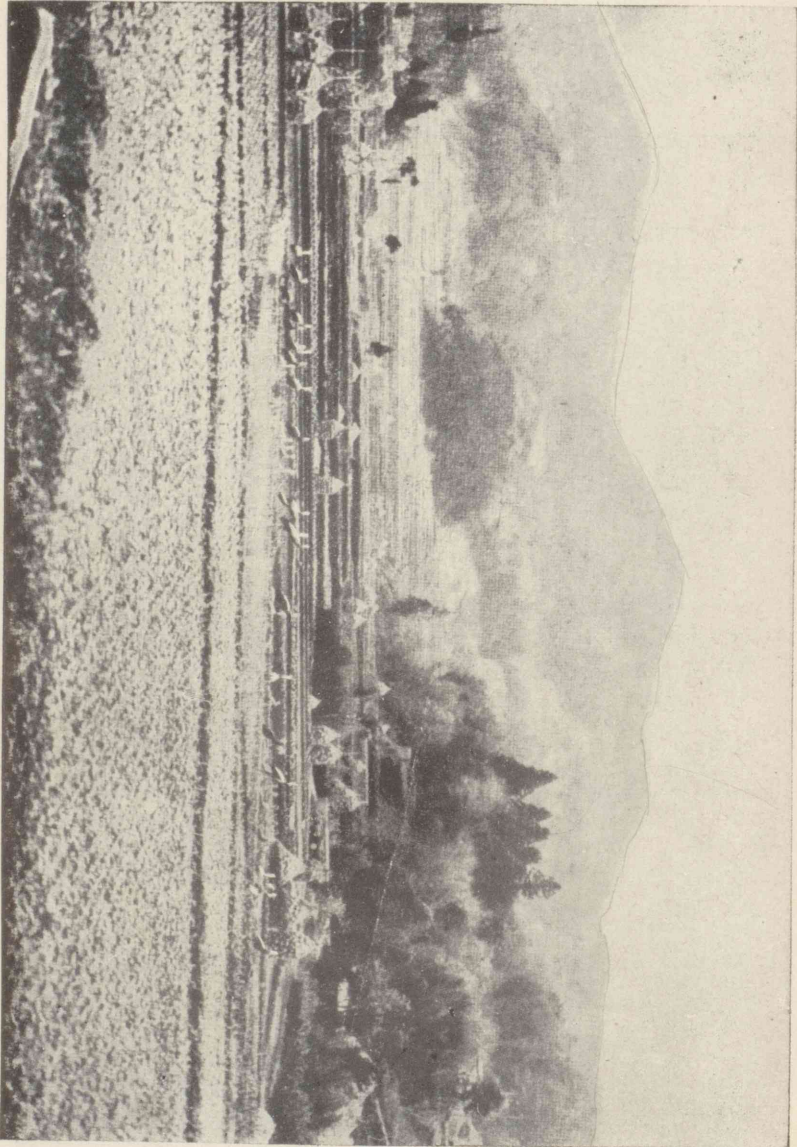
萬劫年ふるかめやまの したは泉の深ければ、  
苔むす岩屋に松生ひて、 梢に鶴こそ遊ぶなれ。

松の木陰

松の木陰に立ちよれば、 千歳の緑ぞ身にはしむ。  
梅が枝かざしにさしつれば、 春の雪こそふりかゝれ。

蓬萊山

蓬萊山には千歳ふる、 萬歳千秋かさなれり  
松の枝には鶴巢くひ、 巖のそばには龜遊ぶ。



(村代八郎毛熊懸口山) 國 の 鶴

## 二〇 鶴の國

横山健堂

春には須く鶴を語るべし。鶴に駕し洞簫を吹いて白日登天するは、人間の夢想境にあらずや。

吾が輩鶴の國を觀て海峽(一)の旅館に歸り、浴室に三助とせなかを流させつゝ、鶴を語る。三助いはく、僕本來北九州に生まる。少年時屢、白鶴の高飛して過ぐるを望みしことあり。白一點碧空に映じて、梅花一片飛んで天に上るが如くなりき」と。

五十年前には鶴の國到る處に在り、梅花開く所の村、鶴來らざるはなかりき。今鶴の國殊に少し。薩南の出水じつみと周防の八代村とに僅かに王國を存するのみ。然れども昔の鶴の國は、鶴群を爲すに至らず。今の鶴の國は、群鶴百二三十羽に至る。恐らくは日本人開闢以來畫中の外には、未だかくの如き自然の大鶴群を見ざりしならん。

(一)馬關海峽。

冲天の意氣

(Alaska)  
北アメリカ最  
北の地方。

動物園の飼鶴は姿態ありて意氣乏し。鶴の清高無比なるはその冲天の意氣ならずんばあらず。故に鶴は野鶴を第一とす。仙鶴といふは野鶴のことなり。

鶴は年々アラスカ地方より遠く萬里の天を高飛して日本に來る。脚下には茫茫たる大海横たはる。その翼を休ましむべき所なし。いかに健翼といふといへども、その勞想ふべし。鶴の脚に短冊を結びつくるは、鶴を愛する所以にあらず。

鶴はその雛を携へて萬里の飛翔をなす。雛鶴の翼疲るゝ時、母鶴はまさにその翼に抱きて飛ぶならん。母鶴も亦勞するかな。哀々の情、眞に想像するに餘りあり。

「燒野の雉子、夜の鶴」の語あり。夜鶴の研究は鶴の國にても未だ分明ならず。吾が輩は夜鶴よりも寧ろ飛鶴を想ふ。雛を携へてアラスカより渡來する時、翼の力よりも愛の力なり。

燒野の雉子  
夜の鶴

鶴の王國は周防熊毛郡八代村なり。島田驛より自動車程、僅かに一時間にして登るを得べし。驛に沿ひて島田川あり、驛前には東北に一帶の青山、天を劃りて、恰も南畫の一大屏風を列ねたらんが如し。自動車は川を溯り、青山を穿ち、千山萬壑を攀ぢて登る。

白露下りて鶴は來り、梅花開き盡して鶴は歸る。嚴霜未だ隕ちずして、田に落穂ありて、田螺或は鱒とちやうなど水田に餌の乏しからざる時、鶴は群居す。天雪を飛ばす頃、鶴は散居し、各餌を獵りて自營す。故に鶴を見るは紅葉の頃を最も佳しとす。

八代村は鶴の王國たるのみにあらず、千禽悉くここに集りて、天下の禽園を成す。禽園の盟主は則ち鶴なり。かくの如き廣大なる鳥の王國は、現世に恐らくは唯一無二なるべし。

鶴の王國は事實に於て人生の樂園たらざんばあらず。花卉珍草茂生して、麗禽飛びめぐる。天地偏に愛らしきものに充たされて、毒

亂山

蛇住まず。鶴未だよく人家に馴るゝに至らずと雖も、必ずしも人を恐れず。  
鶴の王國は海拔二千尺ばかり、亂山高下して四周し、自ら天半に別乾坤を爲す。その地高寒なるを以て石楠花多し。鶴歸り去るの後、春晚より石楠花順次に咲誇り、千溪の杜鵑争ひ鳴き、春より秋初に至るまで山鶯亂れ鳴く。

白雲紅樹

鶴の國は鶴居らずと雖も寂莫たらず。霜の頃鶴の一聲に千禽鳴りを靜むと雖も、鶴居らざる時は夏の禽鳥悉く得意顔して鳴く。  
鶴の繁榮の下に千禽みな繁榮す。村の太陽寺は鶴の一名所なり。寺僧の語るところを聞けば、雉子の二三羽が寺の庭に遊ぶを見るは珍しからず。十三羽の山鳥、寺の玄關に群集せしことありといふ。  
白雲紅樹の青山を背景として、斜に段落をなせる水田の中に、六十羽の鶴の群が展開せるを、正面僅かに一町ばかりの距離より

偵兵

見上げたる時の雄々しく端麗崇嚴なる光景は、吾が輩をして暫く我を忘れて見入らしめたり。

鶴群には必ず偵兵あり、全群みな餌を求むる時も、一羽は四方を觀望し、時々澄みて低き聲を發す。聲急なれば全群皆姿を整ふ。

村を遶りてみな青山なり。この日秋天晴れて暖なれども、村をめぐつて白雲あり。白雲は山の後より盛上りて、嶺上更に遠く奇峰を重ねること、信州より千山を超えてアルプスを望むが如し。時に二三羽の飛鶴あり、聲雲に映じて嘯唳として聞ゆれども、姿は青山に染まりて見えぬ。

鐵騎

群鶴未だ起たず、意まづ改る。鳴聲恰も鐵騎の突出するが如く、一鶴より響き、聲聲急に鶴鶴に響き、極めて急なる交響樂の一刹那を演出す。一音、一音に應じて、五六十羽の野鶴悉く首を擧げ、姿勢を正しくして、昂然として動かさず。

白雲を天幕とし、紅葉青山を舞臺として、天界の雄士五六十羽その仙衣を整へ、胸を張り威儀を正して一齊に正面に注目したる光景は、いかに莊嚴を極めたる大觀兵式の威儀も壓倒せらるべく見ゆ。

神秘なる交響樂すでに終り、餘韻雲に残りて鶴皆鳴かず。限りなき森嚴と緊張の絶頂とに達したる一瞬間、沈黙の夢の幕忽然として揚る。精練せられたる兵士の一隊が行進を始めんとして、上半身を前に乗出す一刹那の如く、無聲の號令の下に群鶴一様に胸を出し翼を張ると見るや、憂然として長鳴し、百二三十の雄々しき翼の羽ばたきの入亂れたる音に、憂々たる急鳴を交へて、思ひがけなき交響樂を奏しつゝ、大空に向つて舞上る。かくの如き交響樂、人間未だ夢想せず。

聲樂

憂然

無數の月卿雲客その羽衣を翻し、天成の長き肉笛より迸る聲樂

の美しき急調子につれて、算を亂して大空に舞ひ舞うてひろがる。天にゑがけるが如き舞踏の群は、ひろがりたるまゝに散らず、入亂れつゝ、水平的に群れて行き、舞上り舞下り、或は沈んで低く村落の森を遠り、或は高く登りて白雲を超えて青天に浮び出づ。

天界の秋興酣なるらん、大輪郭をゑがきて大空を舞ひあるきたる群鶴は、興盡くるところを知らざるべし。森を超え、邱を超え、鳴聲を地上に送りつゝ、その舞うて行きしところは見えぬ。吾が輩は天上の舞踏を見たり。この時夢にはあらず。

二一 野村望東尼

佐々木信綱

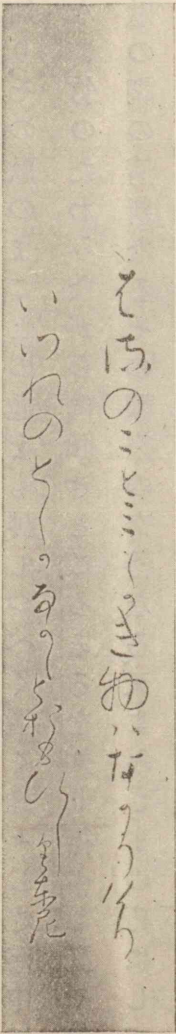
望東尼は筑前福岡の人、文化三年浦野勝幸の三女として生まる。容うるはしく、歌をよくし、書に巧に、裁縫、刺繡の業にもたけたりしが、同藩の士野村貞貫の詩歌に嗜深く、正義廉直の士なるを聞きて、

(一)光格天皇の御代。三年は紀元二四六六年。

時勢日に非  
(一)名は忍向。京都清水寺の住僧。安政五年十一月西郷隆盛と俱に海に投じて死す。年四十六。  
(二)福岡藩士。勤王を唱へて幕吏に捕へられ、元治元年七月刑せらる。年四十三。  
(三)山口藩士。吉田松陰の弟子。慶應三年(二五二七年)病死。年二十九。  
(四)三條實美。明治十八年まで内大臣。明治二十四年薨す。

先妻の子三子あるをも厭はず、野村氏に嫁ぎてよくその家を治め、先妻の子をおほし立て、一家和合、春風の吹くが如くならしめぬ。後家を長男に譲りて、平尾村の邊、静かなる境に世を避けしに、安政の四年といふに、夫世を去りしかば、剃髪して佛の道に入り、その名もと女を望東尼と改めぬ。當時幕府の専横甚だしく、時勢の日に非なるを見るにつけても堪へがたく、密に交を志士に結び、あるはその山莊を會合の所とし、あるは同志をかくまひなどして、眞心を盡しぬ。されば、彼の僧月照が薩摩へ下りし時はここに宿し、又平野國臣、高杉晋作等をも潜ましめ、その危きを救ひて、ねもごろにいたはり、又太宰府に幽閉せられし三條公に謁しなどしたり。かゝる事つもりつもりしかば、終に罪を得、捕はれて浪風荒き玄海灘の一孤島、陸地を距る五里冲なる姫島の牢獄にこめられぬ。そこに在ること二年、身を容るべきは、僅かに四疊の荒板敷、めぐりには松の檻木を組

み、荒格子を構へて、海見ゆる南の方にのみ小さき窓ある牢の中にかよわき老の身の押込められて、暑さ寒さを忍び居しに、彼の高杉晋作はその舊誼に報ゆべく、同志を遣りて姫島の牢檻を破り、望東尼を奪ひて長門に隠せしかど、老軀長く堪ふるを得ず、維新の大業



望東尼筆蹟

はるのごと  
みじかき物  
はなかりけ  
りいづれの  
としかなが  
くとおもひ  
し 望東尼

一生の閱歷

成るを見ずして、慶應三年十一月六日、年六十二歳にて、病のために空しくなりぬ。女ながらも皇國のおん爲、大君のおん爲に心を碎き、あるは志士の病をとぶらひて慰め勵まし、あるは同志の間に入りて互に志を通ぜしめしなど、その心づかひなみくならず、誠にその一家の良妻賢母なりしが如く、陰に維新の大業を扶けし烈婦の一人なりき。その一生の閱歷かくの如く、さながら一篇の詩なりし。

歌文の錦  
句々皆血涙  
の跡をとむ

なよ竹のた  
わみなから  
に強きとこ  
ろあり  
(一)筑前福岡の  
人。歌人。文  
久年中大阪に  
出でて歌を教  
ふ。  
堂奥に達す

かも忠誠燃ゆるが如き真心を緯とし、感じ易き優しき女心を經として、優れたる才をもて、この間に織りなしつゝる歌文の錦、いかで世の常なるべき。

彼が歌は、或は悲憤慷慨、憂國の至情あふれて、句々皆血涙の跡をとむるあり。或は優麗閑雅、やさしき鶯の初聲を聞くが如きあり。しかもこの両面を相むがへ見て、始めてそのすぐれたる人となりを知り、その歌のまことの趣をも解しつべく、猛く雄々しきが中にも、なよ竹のたわみながらに強きところあるを知り得べし。且やその歌の調の清新なる、その觀察の奇警なる、又よみざまの巧にして手のきゝたる、その修辭に、用語に、自由輕妙にして、その師大隈言道さながらなるあり。もとより生具の天才ならんも、またよく師を學びて堂奥に達せしものにあらざらんや。以てその修養の淺からざりしを知りぬべし。而してその歌の悲憤慷慨の一面は、これ彼が境遇

性情より得來りしところにして、言道が和歌には見えざるところなり。  
— 歌學論叢 —

二二 女を詠める歌

天照大神

本居宣長

大海原  
わたの原島の八十神よもの國

ひかりあまねく天てらす神

衣通姫

香川景樹

ことのはの玉の光もからころも

てりこそとほれ萬世までに

小野小町

小野務

六くさのみ人の折りつる秋の野の

はなにまじれるをみなへしかな

(一)允恭天皇の妃。和歌に長じ、和歌の神として和歌浦の玉津島神社に祭らる。  
(二)平安時代初期の歌人。六歌仙の一人。  
(三)歌人。備中の人。



(一) 一條天皇の皇后定子に仕ふ。歌をよくし、又枕草子の日の争の雪と枕草子に見えたり。  
 (二) 歌人。遠江の人。安政六年(二五)九十九年歿。  
 (三) 一條天皇の宮上東門院に仕ふ。源氏物語を著す。  
 (四) 國學者。伊勢長門人。本居宣保四年(二)四年歿。  
 (五) 國學者。石見國津和野藩士。明治四年歿。  
 (六) 明智光秀の第三女。石田三成や、夫人を擧ぐ大阪城中に取さんとす。夫とな

人聽かず、三成の兵來り及び、二兒を殺して自殺す。

清少納言<sup>(一)</sup>

かきつめし雪の日かすの争も

きえせで残る筆のあとかな

紫式部<sup>(三)</sup>

むらさきの深き根ざしもかきつめし

その巻々に見ゆる言の葉

常磐御前

しら雪のかゝる憂身のなげきにも

こすゑ花さく春をこそ待て

楠木正行母

ちゝのみのちゝばかりかははゝそばの

ちるべき時を子にをしへけり

細川忠興妻<sup>(六)</sup>

石川依平<sup>(二)</sup>

本居大平<sup>(四)</sup>

本居宣長

大國隆正<sup>(五)</sup>

小野務

みなぶちの細川山にほふかな

種にはよらぬなでしこの花

### 二三 色彩

井上哲次郎

色彩は美術上極めて重要な地位を占め、特に繪畫にありては缺くべからざる要素なり。水墨畫若しくは鉛筆畫の如く、これを須ひざるものもあれど、繪畫の最大部分は色彩を施せるものなり。この故に、色彩の性質、關係、結果等を研究するは、畫家の怠るべからざるところなり。その他、建築器具、服裝及び百般の裝飾品、一として色彩の調和を要せざるはなし。

主要なる色彩の中に於て、赤色と黑色とは正反對にして、赤色は快活の趣を有し、黑色は陰鬱の趣を有す。旭日の始めて昇るや、その色赤くして金線亂射し、海雲悉く朱に染むが如し。世界萬物夜氣の

Geoffrey Chaucer 英國の文學者。西曆一四〇〇年。

西山に春づく  
歸雲を煨く

爲に淨潔となれる後、赫々たる曉光を東天に望む時は、快活の感自らに起るものなり。詩人チョーサーは、「東天皆笑ふ」の句を以てこの曉光を形容せり。これ直ちに快活の感を天地に附して、これを寫象せるなり。桃花若しくは杜鵑花の如き、赤色の花相簇りて咲亂るゝ時は、同一の結果を生ぜずといふことなし。晩秋の草木漸く黄ばみ凋む時に當りて、千山の紅葉一時に燃えて、天をも焼かんとす。これ一年中最後に得らるゝ快活の感なり。これを一日に比すれば、夕陽西山に春づいて烈火の如く、炎々として歸雲を煨くの状態に同じ。紅色は赤色より一層愛すべきところあり。淺紅色は猶一層愛すべきところあり。櫻花の爛漫として雲の如きも、淺紅色にあらざりせば、愛すべきもの少かるべし。但し白にして未だ全く白ならず、紅にして未だ全く紅ならず、恰も雪に色あるが如く、僅かに淺紅色を帶ぶるところ、愛すべきもの多しとす。雨中又は月夜の櫻花最も愛

すべきが如し。紅色に反して、赤黒色はすでに赤色の階級を過ぎて、陰鬱の方に近きものなり。人に譬ふれば、赤色は中年の如く、赤黒色は晩年の如く、紅色は青年の如く、淺紅色は幼年の如し。その間自ら聯想の存すること、決して否定すべからざるなり。

黒色は赤色に反して、陰鬱の觀念を惹起す。偶、深山幽谷を過ぐるに當りて、日すでに没して天漸く暗ければ、おのづから不快の感を生ずべし。その時煌々たる燈火を得ば、これを頼んで行くべしと雖も、若し不幸にしてこれを得ず、獨り暗黒の中に彷徨すと假定せば、その不快果して如何ぞや。これ黒色が陰鬱の觀念を惹起すればなり。黒色は又悲哀の記號として喪服に用ひらる。蓋し悲哀は陰鬱の程度を高めたるものなればなり。黒色は人目を射るが如き鮮明なる色彩にあらざるが故に、眞面目の意味もあり。禮服の黒色なるものあるは、蓋しこれがためなり。要するに、黒色は五色中に於て最も

長空蒼々  
積水渺々

裝飾的効力に乏しきものなれども、他の色彩と反對をなし、それを  
して愈々顯著ならしむる價值あるが如し。

青色は深遠悠久の趣あり。これいかなるところより來るか。仰い  
て天を觀れば、長空蒼々として窮なし。俯して海を觀れば、積水渺々  
として碧なり。又曠野を眺め、遠山を望めば、草木皆合して一色を成  
し、眼界皆青し。殊に松葉の翠の如きは、耐久の意味を有す。かくの如  
く天地間の現象を觀察すれば、おのづから青色に深遠悠久の趣を  
附與する傾向を免れざるべきなり。然れども青色には深淺の別あ  
り。淺青は又淺薄未熟の趣を有す。青黄色は衰弱の象にして、頗る凄  
氣を帶び來るところあるが如し。

淡遠

荒村籬落

黄色は思ふに淡遠の趣あるにあらざるか。野外に咲きたる菜花  
の色の如き、自らその趣あり。夕陽黄葉の景に至りては、尙一層その  
然るを覺ゆ。荒村籬落の間に山吹の花の咲きたるが如き、世間を離

塵俗を超脱  
す

刀劍露を湛  
ふ

れて別に淡遠の趣を存す。をみなへし若しくは黄菊の如き亦然り。  
黄色に光澤の合一せるは、淡遠といふよりは寧ろ高遠の趣あり。黄  
金色即ちこれなり。

白色は清淨潔白の趣あり。梅花の白うして雪の如くなる、高士たかしの  
清節に比するを得べし。古より清廉せいれんの士、往々梅花を愛す。蓋しその  
性の相似たるものあるが爲なり。雪後雲晴れて、月天心に高く、寒光  
梅を照らす時、最も清淨潔白の感を惹起し、人をして殆ど塵俗を超  
脱する思あらしむ。又月前の梨花の如き、寒江の蘆花の如き、白雪の  
如き、皆潔白の意味より外にこれなかるべし。神道の儀式には、多く  
は白色の禮服を着く。これまた清淨潔白を尙べばなり。白色光澤を  
帶ぶれば凄氣を生ず。白眼にして人を睨むが如き、すてに十分なる  
凄氣あり。刀劍の露を湛へんとするが如き、月色の白うして氷に似  
たるが如き、いづれも凄氣を帶びざるはなし。

花詞

紫色は快活の深遠にせられたるが如き趣あり。その他種々なる間色にもそれ〴〵特殊の意味あるべし。西洋にて各種の花に意味ありとして、いはゆる花詞を成せるものは、主として色彩に基づけるならん。然れども、これもと俗習の致すところに過ぎざるが如し。

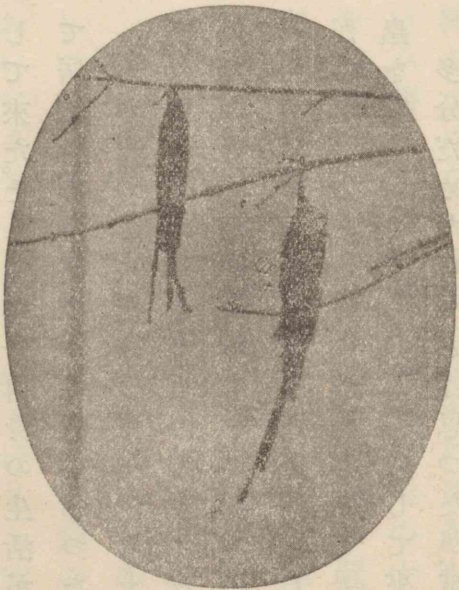
自修文

二四 簞蟲と蜘蛛

寺田寅彦

二階の縁側の硝子戸のすぐ前に、大きな楓が空一杯に枝を擴げて居る。その枝に澤山な簞蟲がぶら下つて居る。

去年の夏中はこの蟲が盛に活動して居た。いつも午頃になるとはひ出して、小枝の先の青葉をたぐり寄せては食つてゐた。身體の割に旺盛な彼等の食慾は、多數の小枝を坊主にしてしまふまでは、満足されなかつた。紅葉が美しくなる頃には、もう活動はしなかつたやうである。とにかく私は日々に變つて行く葉の色



簞 蟲

彩に注意を奪はれて、しばらく簞蟲の存在などは忘れてゐた。しかし紅葉がひからび縮れて、やがて散つてしまふと、裸になつた梢にぶら下つて居る

多數の簞蟲が、急に目立つて來た。大きいのも、小さいのも、長い小枝を杖のやうにさげたのも、枯葉を一枚肩に羽織つたのも、色々様様の恰好をしたのが、明るい空に對して黒く浮出して見えた。それがその日そ

の日の風に吹かれて、揺いて居た。

かよわい糸で吊されて居るやうに見えるが、いかなる木枯にも決して吹落されないほど、しつかり取付いて居るのであつた。

縁側から箒の先などで、はね落さうとしたが、そんな事ではなかなか落ちさうもなかつた。自分は冬中この死んで居るか生きて居るかも分らない蟲の外殻の、鈴生すずなまになつて居るのを眺めて暮して來た。そして自分自身の生活が、なんだかこの蟲のによく似て居るやうな氣のする時もあった。

春がやつて來た。今まで灰色や土色をして居たあらゆる落葉樹の梢には、いつとなしにぼうつと赤味がさして來た。鼻の先の例の楓の小枝の尖端も、一つく膨みを帯びて來て、それがちやうどガーネットのやうな光澤をして輝き始めた。私はそれがやがて若葉になる時の事を考へて居るうちに、それまでにこの糞蟲を驅除して置く必要を感じて來た。

多分だめだらうとは思つたが、試に物干竿の長いのを持つて來て、たゞき落しはね落さうとした。しかしやつぱり無効であつた。はねる度にあの方錘形ほうすゐがたの袋は、プロペラーPropellerのやうに空中に輪

Garnet.  
柘榴石。深紅色。

Propeller.  
推進機。

Nickel.

をかいて、廻轉するだけであつた。悪くすると、小枝を折り若芽を傷つけるばかりである。今度は小さな鋏を出して來て、竿の先に縛りつけた。それは數年前に流行した十幾通りの使方のあるといふ西洋鋏である。自分は今その十幾種の外の、もう一つの使方をしようといふのであつた。鋏の發明者も、よもやこれが糞蟲を取る爲に使はれようとは思はなかつたらう。鋏の先を半ば開いた形で、竿の先に縛り付けた。圓滑な竹の肌と、ニッケル鍍金ニッケルメッキの鋏の柄とを縛り合はせるのは、餘り容易ではなかつた。

ぶらくする竿の先を、狙ねらを定めて蟲の方へ持つて行つた。そして開いた鋏の刃の間に、蟲の袋の口に近い處をくひこませておいて、そつと下から突上げると、案外にうまくちぎれるのであつた。それでも可なりに強い抵抗の爲に、細長い竿は弓狀に曲る事もあつた。幸に枝を傷つけないで、袋だけをむしり取ることが出來たのである。

個性  
そのもの特有  
な性質。

繊維  
すぢ

出庭の楓のはあらかた取盡して、他の樹のも漁つて歩いた。結局  
數へて見たら、大小取交せて四十九個あつた。それを一遍庭の芝  
生の上にはぶちまけて、並べて見た。  
一つ一つの蟲の外殻には、やはりそれだけの個性があつた。割に  
大きい長い枯枝の片を並べたのが大多数であるが、中には殆ど  
目立つほどの枝片は附けないで、澁紙のやうな肌をして居るの  
もあつた。えにしだの豆の莢をうまくつなぎ合はせて居るのも  
あつて、これがのそくはつて歩いて居た時の滑稽な様子が、自  
ら想像された。  
就中大きなのを選んで袋を切開き、蟲がどうなつて居るかを  
見た。と思つた筈の先の缺を外して、袋の両端から少しづつ蟲  
を傷つけないやうに注意しながら切つて行つた。袋の纖維はな  
かなか強靱であるので、鈍い缺の刃は屢切損じて、上滑りをした  
やつと取出した蟲は、可なり大きなものであつた。紫黒色の肌が

懶氣  
たるさうに  
大儀さうに。

舍利  
かたまつて死  
んだもの。

Percent.  
例。百分比。  
百に對する比  
百分比。

ほち切れさうに肥つて居て、大きな貪慾さうな嘴は、褐色に光つ  
て居た。袋の暗闇から急に強烈な春の日光に照らされて、蟲のが  
らだにどんな變化が起つて居るか、それは人間には想像もつか  
ないが、なんだか酔つてても居るやうに、或はまだ永い眠がさめ  
切らないやうに、懶げに八對の足を動かして居た。芝生の上に置  
いて、もとの古巢の空殻を頭の處におつつけてやつても、最早そ  
れを忘れてしまつたのか、はひこむだけの力がないのか、もうそ  
れぎり身體を動かさないで、じつとして居た。  
もう一つのを開いて見ると、それは身體の下半がひすばつて、  
舍利になつて居た。蠶にあるやうな病菌が、やはりこの蟲の世界  
にも入りこんで、自然の制裁を行つて居るのかと想像された。し  
かし、養蠶の恐しい敵はまだ外にあつた。  
澤山の袋を外からつまんで見て居るうちに、中空で蟲の御留  
守になつて居るのが、可なり多くのパーセントを占めて居るの

Millimetre.  
三厘三毛。

に氣が付いた。よく見て居ると、そのやうなのに限つて、袋の横腹に直徑一ミリメートルかそこらの小さい孔のある事を發見した。變だと思つて、鋏でその一つを切破つて行く中に、袋の中から思ひがけなく小さい蜘蛛が一疋飛出して來て、慌しくどこかへ逃去つた。ちらりと見ただけであるが、それは薄い紫色をした、かはいらしい小蜘蛛であつた。

この意外な空巢の占有者を見た時に、私の頭に一つの恐しい考が、電光のやうに閃いた。それで急いで袋を縦に切開いて見ると、果して袋の底に滓のやうになつた箕蟲の遺骸の片々が残つて居た。あの肥大な蟲の汁氣といふ汁氣は、悉く吸盡され嘗盡されて、たゞ一つまみの灰のやうな物しか残つて居なかつた。たゞあの堅い褐色の嘴だけは、そのまゝの形を留めて居た。それはなんだか兜の鉢のやうな恰好にも見られた。灰色の擴穴の底に朽残つた戦衣の屑といつたやうな氣もした。

擴穴  
はかあな。

この恐しい敵は、箕蟲の難攻不落と頼む外廓の壁上を、忍足ではひあるくに相違ない。そして僅かな弱點を捜しあてて、そこに鋭い毒牙を働かせ始める。壁がやがて破れたと思ふと、もう箕蟲の脇腹に一滴の毒液が注射されるのであらう。

人間ならば來年の夏の青葉の夢でも見ながら、安樂な眠に包まれて居る最中に、突然脇腹を食破る狼の牙を感じるやうなものである。これを拂ひ除ける爲には、箕蟲の足は全く無能である。唯一の武器とする物を使はうとすると、餘りに窮屈な自分の家は、身體を曲げる事を許さない。最期の苦惱にもがくだけの餘裕さへもない。生物の間に行はれる殺戮の中でも、これは恐らく最も残酷なものの一つに相違ない。全く無抵抗な状態に於て、そして苦痛を表現する事すら許されないうで、一分だめしに殺されるのである。

蟲の肥大な身體は、その十分の一にも足りない小さな蜘蛛の

一分だめし  
少しづつ、小さい  
なまれる。

調節  
つりあひをと  
ること。

自負心  
うぬぼれ心。

据膳  
すぐたべられ  
るやうにし  
て、そなた  
お膳。

腹の中に消えてしまつて居る。残つたものは僅かな外皮の屑と、そして依然として小さい蜘蛛一疋の「生命」とである。差引した残の「物質」は、どうなつたか分らない。……  
養蟲が繁殖しようとする處には、自らこの蜘蛛が繁殖して、そこに自然の調節が行はれて居るのであつた。私が養蟲を驅除しなければ、今に楓の葉は食盡されるだらうと思つたのは、餘りに浅はかな人間の自負心であつた。寧ろ唯そのまゝにもう少し放置して、自然の機巧を傍觀した方が、よかつたやうに思はれて來たのである。養蟲にはどうする事も出來ないこの蜘蛛にも、亦相當な敵があるに相違ない。昆蟲の生活といふ書物を讀んだ時に、地蜂の或ものが蜘蛛を攻撃して、その毒針を正確に蜘蛛の胸の一局部に刺通して、これを麻痺させるといふ記事があつた。麻痺した蜘蛛の脇腹に、蜂は一つの卵を産みつけて行く。卵から出た幼蟲は、親の据膳をして置いてくれた佳肴を、貪り食うて生長す

飽食  
腹いっぱい  
すること。

國際聯盟云

最近の世界大  
戰後、各國間  
に國際聯盟が  
結ばれて、互  
に戰爭を防止  
すつた。それ  
で人間は、や  
や平和の歩  
みを見ている。  
この美しい花  
園の中で、行  
はれてゐる。  
(Chitin.)  
節足動物の甲  
殻中に存する  
物質の物。

山。十分飽食して眠つて居る間に、幼蟲の單純な身體に複雑な變化が起つて、今度眼を覺すと、もう一人前の蜂になつて居るといふのである。

或蜘蛛が、或蛾の幼蟲であるところの養蟲の胸に食ひついて居る一方では、養蟲のやうな形をした或蜂の幼蟲が、他の蜘蛛の腹をしやぶつて居る。このやうな鬭争殺戮の世界が、美しい花園や庭の木立の間に行はれて居るのである。人間が國際聯盟の夢を見て居る間に、……  
或學者の説によると、動物界が進化の途中で二派に分れ、一方は外皮に硬いキチン質を具へた昆蟲になり、その最も進歩したものが蜂や蟻である。又他の分派は中心に硬い脊骨が出來て、その一番發展したのが人間だといふ事である。私にはこの説がどれだけほんたうだか分らない。しかしいづれにしても、昆蟲の世界に行はれると同じやうな鬭争の魂が、あらゆる有脊椎動物を



傳はつて來て、最後の人間に到つて、どんな具合に進化して來たかをつくづく考へて見ると、つまりは吾々の先祖が、箕蟲や蜘蛛の先祖と同じであつてもいいやうな氣がして來る。

四十九個の紡錘體の仕末に困つたが、結局花畑の隅の土を深く掘つて、その奥に埋めてしまつた。その中の幾パーセントにはきつと蜘蛛がはひつて居たに相違ない。かうして私の庭での箕蟲と蜘蛛の歴史は、一段落に達したわけである。

しかしこれだけでは、この歴史は濟みさうにも思はれない。私は少からざる興味と期待をもつて、今年の夏を待受けて居る。

——冬彦集——

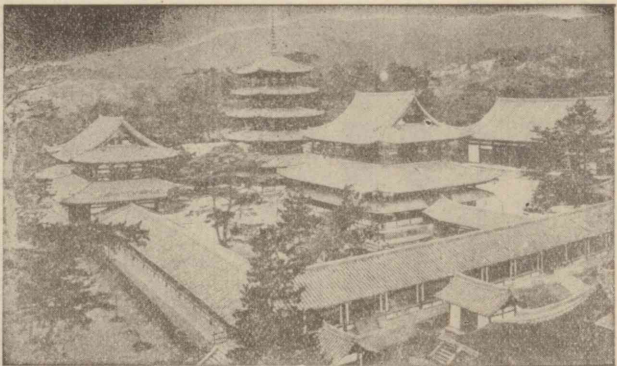
### 二五 我が國の文化 その一 笹川 種郎

殘丹零聖

木立もの古りたる春日の森のほとり、目も爽に若草萌える三笠山の麓、朱の宮居は自然の翠色と相映じて、古佛刹の殘丹零聖はあ

浮圖寶輪  
花明柳暗

搖籃期  
脈々  
春信



法隆寺全景

りし世の榮華を語れる青丹よし奈良の舊都に遊び、轉じて郊外に浮圖寶輪を落日の下に訪ひ、更に花明柳暗の京の都を逍遙し、洛中洛外の遺蹟を探ると、そこに古日本の文化が歴然として展開せられる。七堂伽藍の偉觀を現じた斑鳩宮の名残なる法隆寺は推古朝の文化を示し、東大寺正倉院には天平時代の絢爛たる文華を現存して居る。日本の古文化がその搖籃期にあつた時、脈々たる一道の春信は、朝鮮半島より八重の潮路を渡つて我が邦に入り、文化の基を作つたのであつた。神功皇后の三韓征伐はまづ半島文化との接觸を開き、尋いで應神朝に漢學の傳來あり、そ

將來

春言  
謝  
謝

芥田時節  
筆圖寶飾

の後工藝の將來があつたが、後年欽明朝に佛教の渡來あつて、ここに外國文化の高潮を呈した。漢學の傳來は、支那の儒教思想を朝鮮半島が傳承したのを輸入したのであるが、佛教思想に至つては、源を印度に發したのが、大月氏を経て支那に入り、更に流れ、重て朝鮮半島に渡り、これを我に傳へたのである。

いづれの國民にも國民性といふものがあるが、その國民性は必ずしも一定不變のものとは言へぬ。いかにも國民の血管に傳はつてゐる遺傳もあり、地勢なり風土なりの影響もあるが、外國の文化思想の影響は、國民性を知らず識らずの裡に變へて行く。今日の國民性は、長い歴史の間に影響せられて出來上つたもので、この國民性を永久不變だと信ずれば、それは大なる錯誤である。しかし建國以來、遺傳なり地勢なり風土なりで打つて固めた國民性の基なるものが、おのづと存在してゐることは、否定すべきことではない。そ

の基なるものは、即ち外國文化を同化すべき原動力である。

漢學の傳來があつて、我が國民性に多大な影響を及してゐるが、我が國民性の基即ち當時の國民性と、支那の國民性とは、おのづと異なるものがあつたから、これを傳承するに於ても、そのまゝではなかつた。支那は國土の大と、易姓革命の國柄とで、國民氣質が概して消極的退嬰的であつた。支那の道德には少からず消極道德を教へてゐるのでも、その一般を推知するに難くない。これに反して、一體に機敏で、伶俐で、尙武の氣象が盛で、開國進取の風に富んでゐた我が國民性の基は、積極的で開發的であつた。ばつと開いて雪の如くに散る櫻の花が、我が國民性の象徴であるとは、今もなほ稱せられてゐる。漢學が傳來し、支那の儒教思想が將來せられた時、朝鮮の博士王仁は梅を詠じて、咲くやこの花、といつたといふことである。いかにも梅花は支那の儒教思想、言換へると、支那古代の國民性を

何はのりぬか  
こりはな  
今もなほ稱せら  
咲くやこの花

芬香  
處士

表したもので、雪霜の裡に凍たる芬香を放つてゐるところは、易姓革命の國に於ける處士氣質、即ち浪人氣質を表してゐる。支那詩人が梅花を山中の高士と歌つたのはこの點である。義周の粟を食はずに、首陽山に餓死した伯夷、叔齊は古代支那の理想人物で、梅花を絶愛した林逋は布衣の標本、悠然南山を見た陶淵明は處士の代表者であつた。梅花はこれ等人物の擬化（擬）せられたものといつてよい。王仁が梅花をこの花と稱したのはいかにも儒教思想を表明したものである。しかし平安時代に入ると、歌に詠まれて花と稱するのは櫻花であつた。陽春四月、駘蕩たる春色到らざる處なく、野には陽炎燃え、山には霞たなびく時、櫻花が半天に雲と見まがふばかりに咲きにほつたのは、いかにも陽氣で、生氣の潑刺たるものがあつて、梅花のどことなくしんみりとして陰氣なのとは、同じくない。この陽氣な國民氣質は所在に現れて、その文化は開發的に、進歩的に、急

景象

天に朝す

空翠

速力を以て進展し、外國文化を傳承し、これを同化することをやめないものである。

北方寒帯に近い地と日本海に面する沿岸とは季節に依つて陰鬱を極め、雲低く垂れて、日光を漏らさないこともあるが、一般より言へば、日本の地は氣候温和で、自然の景象は佳なりと言つてよい。島國であるから、随つて規模は小さくあるが、四季をりくくの風景は又なく美しい。八面玲瓏の玉芙蓉は、東海の天に朝（あ）して八朶の蓮華を開き、縹渺一萬頃の琵琶湖は、洋々として水に倒巒晴嵐を涵してゐる。山は紫に水は明に、瀬戸内海の烟波、關東信越諸山の空翠、往く所として佳ならざるはない。雄大莊重な趣は乏しいが、典雅優美な風景には富んでゐる。随つて地勢の影響は、國民をして沈痛でなく、輕快に、深からざるも廣く、哲學的でなくして寧ろ詩歌的とならしめた。更に佛教殊に禪の影響を受けて、頗るあきらめのよい氣質

とならしめた。其の輸入の過程を受け、輸入のものは、  
日本は古來神ながらの道を傳へてある。随つて國民は敬神の念  
に篤い。被ひ清めるといふ觀念からして、清淨潔白を好むに至つた  
のは固より當然である。佛教の感化を受けて肉食の風少く、又土地  
が狭いから、牧畜國民でなくして、農業國民であり、國を環つて海な  
るところから、食肉人種よりも、寧ろ魚介を食ふ人種であつた。建築  
は木造で、衣服は絹木綿の類であるが、天平時代平安時代と、江戸時  
代以後の國民氣質を見ると、その趣味性に於て、非常な懸隔がある。  
この間に一區劃を以てゐるのは、即ち東山時代である。支那の  
宋元時代の文化が鎌倉時代頃から我が邦に輸入され、禪宗も渡來  
し、東山時代に於てこれ等外來の文化宗教はその盛を極め、更に通

空翠

天の降す

魚介

景東

恬淡

俗的普遍的となつて、茶の湯の流行を來し、その影響は國民の衣食  
住及び趣味に及び、國民性にも少からぬ感化を來し、一般に恬淡を  
喜ぶ風となり、華やかよりも、濫いのを愛する風となつた。

軍閥主義

山御も谷御

外來文化は一たび應神朝に渡來せられ、二たび欽明朝に輸入せ  
られ、その後引續いて將來せられて、奈良時代の文化となり、平安時  
代に入つてこれを同化し、その後室町時代に入つて來た新文化は、  
江戸時代に至つてこれを同化し、明治に至つて更に西洋文化の傳  
來があつて、その勢は滔々として極るところを知らざる状態であ  
る。欽明朝に於ける外來文化は、いづれも紀元を劃してゐるもので、  
我が國文化史上の最も重要な時代である。一體我が文化史は、殆ど  
外來文化史で、外來文化があつて、その後これを同化する時代が  
ある。しかしまた更に新外來文化があつて、次に同化時代が來る。け  
れど要するに、從來の外來文化は東洋文化であつたから、多少共通

山鳴り谷應

軍閥主義

した點のないはなかつた。然るに明治以後に傳來せられた外來文化に至つては、全然出發點も開展の途も異なつてゐる西洋文化であるから、我が文化はここに一大變革に出會つたのである。殊に交通の不便であつた古代と、彼我交通の容易で頻繁である今日とは、その文化渡來の程度が違ふ。山鳴り谷應へるが如く、彼の思想文物は我に反響を與へる。曾ては佛國の自由民權思想が盛に輸入された。續いて獨國の軍閥主義が渡來して、我が邦を軍閥化させた。歐洲大戦争以後改造の聲が盛になつて、我が邦に於ける思想界は空前の動搖を受けつゝある。とにかく明治以後傳來した外國文化と従前のものとは非常な相違があつて、衣食住が全然異なると同じく、物質的に、精神的に、非常な徑庭が存在してゐる。随つて我が國民がこれによつて受ける影響の多大なことは言ふまでもない

—日本繪畫史—

### 二七 佛像彫刻

瀧 精 一

支那、日本の彫刻は、いづれも印度傳來の佛教に伴なうて開けたものであることは明白である。又印度の方ではギリシヤの影響が存外大きい。だから、延いて支那、日本の彫刻が印度並びにギリシヤ的風致を傳へて居ることも、今日では殆ど動かすことの出來ぬ定説となつて居る。

元來支那本國では、佛教渡來以前には、さのみ彫刻の發達して居た形跡は認められない。實に支那上古に於ける偶像彫刻は、微々たるもので、僅かに金石類の工藝的な彫刻が行はれて居たに過ぎないやうである。これは一つには、その國の古代の風習が然らしめたのであらうと思はれる。特に支那では、その特殊な倫理主義に基づいて、懲惡の目的を以て惡人の像を作り、これを打つたり、毀つたり

懲惡

土偶

新機軸

した。銅器などの工藝品でも、饗養を始めとして、さまざまの姦惡な者の像を刻する風が行はれた。ところが一體美術としての彫刻には、惡人の像は不適當なのだから、かういふ物の盛に行はれたといふことは、とりもなほさず、この國の藝術の發達することの出來なかつた所以なのである。

我が國では、佛教渡來以前にも、土偶類は隨分盛に製造せられたに相違ないが、これ等は専ら崇拜の對象として作られたものではなく、單に實在人の代用に供せられたに過ぎない。それで佛教の輸入せられてからの彫刻はどうかといふと、最初は印度、ギリシヤ式そのまゝの物が多かつたのであるが、次第に自國の風に變化して來て、新機軸、新意匠を出して、支那や朝鮮は勿論、その本家たる印度以上に進歩したのである。

我が國では、推古時代が始めて佛像彫刻の開けた時代で、この時

黄金時代

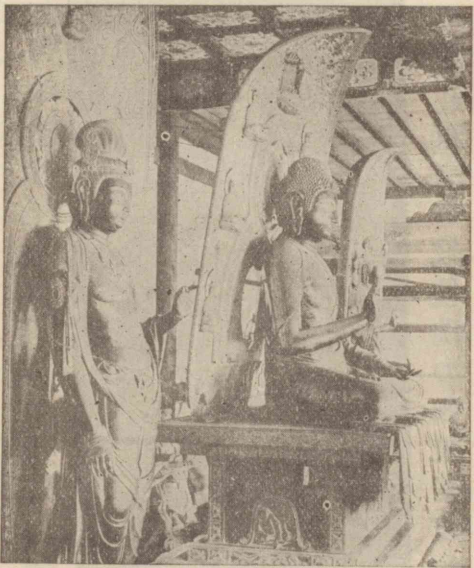
衣紋  
流麗



東大寺三月堂の梵天

代の作品はなほ素朴の域を脱して居ない。然るに天平時代に至つて異常な發展を來した。勿論當時は支那唐代の感化もあつたが、又大いに獨立自由の發達が見られるのである。史家は或は天平時代を以て日本彫刻の黄金時代だと稱へて居る。いかに今日遺つて居る當時の作品中、東大寺三月堂の梵天、帝釋の如き、藥師寺金堂の藥師三尊の如き、東大寺戒壇院の四天王の如きは日本藝術史を飾る至妙な作品といはねばならぬ。藥師は面相が豊滿で、體格もよく整ひ、衣紋も流麗で、いかにも自然に出來て居る。三月堂の梵天、帝釋の方は前者のやうに豊滿ではなく、寧ろ崇高、典雅と評すべきで、一種いふべ

失當



藥師寺金堂の藥師三尊

からざる神的な性格を象徴して居るやうで、いはゆる形體と思想の融合宜しきを得て居る。人或はこれを以てギリシヤ彫刻のアテナ神の倣のあるものと評するものも、あながち失當の言ともいはれない。戒壇院の四天王に至つては、表情權衡皆宜しきを得た上に、沈着篤實の趣を具へて居る。

抑、天平時代の彫刻は面貌、姿態、衣紋等の諸點に於て精妙なところのあるは勿論、その全體に於て、彫刻に最も必要な安泰といふ條件を有して居ることが、殊にその貴ぶべき點である。畢竟この安泰の趣は精神が形體に充滿した時に始めて得ら

拘定

這般

(Taraodoom,  
ギリシヤ傳説  
に、トロイの  
アポロ神に奉  
仕せし僧。



戒壇院の多聞天

れるので、これに反するものは拘定固着である。拘定固着といふのは精神のないもの、或は精神はあつてもその活動の自由を缺いたものである。然るに安泰といふ條件は、その形がいかに複雑になつても、又いかなる活動状態にあつても、必ずこれを具備すること、を要するもので、西洋に於けるその適例の一として、かのラオコーンの像を挙げれば自ら明らかになることであらう。彫像に這般の安泰の趣を缺いて、人をして輕佻不安の念を抱かしめるものは、決して眞に理想的な作品といふことは出来ない。天平彫刻の三作品の如き、いづれもこの點に於て宜しきを得て居る

が、とりわけ戒壇院の四天王の如き、その性質の元來活動的なものに於て、よくこの條件を具へ得たのは讚嘆すべきことである。

又天平時代には東大寺大佛の如き巨像も作られ、佛、菩薩、天部の像の外に、肖像彫刻の類にも亦見るべき物がある。その他伎樂くわがの假面などにも、優秀なものが残つて居る。

乾漆  
想見す

かくの如くその種類は甚だ雑多で、材料も銅、木、乾漆、塑土等種々な區別がある。以て當時の彫刻が、いかに大きな發達をして居たかを想見することが出来る。

相好

天平期に次いで、鎌倉時代が彫刻の隆盛を極めた時代である。鎌倉期の作品として代表的な物の中で、殊に秀れて居るのは、鎌倉大佛、東大寺南大門の仁王であらう。鎌倉大佛は頗る自然に彌陀の尊容を表して、慈悲圓滿の相好、内外人の等しく讚美するところである。東大寺の仁王に至つては、當時の巨匠運慶、湛慶兩人の手に成

匹儔

つたもので、その潤達な手法には、眞に驚くべきものがある。要するに、この期の像は天平時代のに比して稍寫實に進み、且手法の巧妙を増進したことは事實である。而して尙看過すべからざることは、日本的な要素の愈、多く顯れて來たことであらう。然るに遺憾なことは、我が國の彫刻は、鎌倉時代を最後として、足利を經、徳川期に入つて漸く衰運に傾いて、その間殆ど何の見るべき物もなくなつた。けれども偶像彫刻ならぬ金屬、木、竹、甲、角の類の工藝的彫刻が新に開拓せられて、この方面に於ては實に他に匹儔を見ざるまでの著しい進歩を遂げたのである。 — 藝術雜話 —

二八 名 數

三種神器、三大節は國民として知らぬものなかるべし。女子三從の道は儒教の説けるところにして、我が國にても古くより三つの

人  
上巳  
端午  
七夕



(一) 國學者。近江の人。文化三年(二四六)歿。年七十六。  
 (二) 歌僧。備中(或は備後ともいふ)の人。寛政十一年(二四八)歿。年八十五。  
 (三) 俗姓は塚田。信濃善光寺の人。文化二年(二四六)歿。  
 (四) 正月七日、三月三日、五月七日、九月九日。  
 (五) 桓武天皇の裔といふ。傳詳ならず。  
 (六) 近江の人。貞觀頃の人。  
 (七) 字は文琳。清和、陽成、兩天皇に仕ふ。  
 (八) 俗名良峰宗貞。仁明天皇二年(八五五)歿。年五十五。

従ふ道といへり。三后は太皇太后、皇太后、皇后、三公は太政大臣、左大臣、右大臣なり。四天王の名は佛教守護の神持國、增長、廣目、多聞より出で、源頼光の家來に渡邊綱、坂田金時、碓井貞光、卜部季武の四天王あり。武將の四天王はその他にも多し。徳川時代京都和歌の四天王と呼ばれたるは、伴蒿蹊、小澤蘆庵、澄月、慈延なりき。源、平、藤、橘を四姓といへるは、最も榮えたる氏族をいへるなり。士、農、工、商を四民といひて、古は士を四民の第一とせしが、今は平等にして、いづれも納税、兵役の二大義務を負ひて、我等自ら我が國を護るなり。木、火、土、金、水を五行といへるは、精密なる現今の科學に照らしては、價值なし。一年五節供こそ往古の風俗もしのばれて、ゆかしきものなれ。六歌仙は喜撰法師、大友黒主、在原業平、文屋康秀、僧正遍昭、小野小町の六人にて、六人の中一人の女流あり。大友黒主を除きては、その歌皆百人一首に採られたり。六玉川とて和歌の名所に歌はれたるは、山城、攝

(一) 平沙落雁、遠浦歸帆、山市晴嵐、江天暮雪、洞庭秋月、瀟湘夜雨、煙村夕陽、漁村夕陽。  
 (二) 支那唐代宋代に於ける八名家の文を撰輯せし書物。



六歌仙(笠翁筆)

津、近江、紀伊、武藏、陸奥の六箇所にあり。七月七日の七夕は五節供の一。七福神と七草とは諸子すでにこれを學べり。近江八景を始として勝地に八景を立つること各所にあり。もと支那洞庭湖の八景に倣へるなり。唐宋八家文は漢文にしてむづかしけれど、里見八犬傳は徳川時代の小説にして、何人にも讀易し。我が國の女帝は九代を數へ奉る。推古、皇極、齊明、持統、元明、元正、孝謙、稱徳、明正これなり。甲乙丙丁戊己庚辛壬癸の十干、子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥の十二支は年紀を數ふるものにして、

(一)陽明、待賢、  
郁芳、美福、朱  
雀、皇嘉、談  
天、漢壁、股  
富、安嘉、降  
慶、達智の十  
二門

(二)藤原不比等が  
元正天皇より  
追贈せられし  
號  
(三)岩代國信夫郡  
信夫郷の庄  
司

(四)能登守平教  
經

今尙用ひらる、宮城の十二門、和歌の二十一代集と三十六歌仙、赤穂の四十七士、源氏物語の五十四帖等、數限りもなく多し。

### 二九 主従の別

十六人思ひくゝに落掛るところに、音に聞えたる剛の者あり。先祖を詳しく尋ぬるに、鎌足の大臣の御末、淡海公の後胤、佐藤のりたかが孫、信夫の佐藤庄司が二男、四郎兵衛藤原の忠信といふ侍なり。人も多く候に、御前に進み出でて雪の上に跪きて申しけるは、君は御心安く落ちさせ給へ。忠信はこれにとゞまり候うて、麓の大衆を待ちえて、一方の防矢仕り、一まづ落し參らせ候はばや。と申しければ、尤も志はうれしけれども、御邊の兄繼信は、屋島の軍の時義經が爲に命を捨て、能登殿の矢先に中りて亡せしかども、これまで御邊のつき給ひたれば、繼信も兄弟ながらいまだある心地こそしつれ。

(一)文治二年、一  
八四六年)  
(二)初め義經彼を  
頼みて成人  
す。  
(三)高倉天皇の御  
元代。二年は紀  
年。一八三八

年の内は思へばいく程もなし。人も命あり、我も長らへたらば、明年の陸月の末、二月初には陸奥へ下らんずれば、御邊も下りて秀衡をも見よかし。又信夫の里にとゞめ置きし妻子をも、今一度見候へか



義經の木像

し。と仰せられければ、さ承り候ひぬ。治承二年の秋の比、陸奥を罷り出で候ひし時も、けふよりして君に命を奉りて、名を後代にあげよ。矢にも中り死しけると聞かば、孝養は秀衡が忠を致すべし。高名度に及ばば、勳功は君の御計らひとこそ申し含められしか。命を生きて故郷へ歸れと申したることも候はず。信夫にとゞめ候ひし母一人候も、その時を最後とばかりこそ申しきりて候ひしか。弓矢と

けふは人の  
上あすは我  
が身の上

綸言

る身の習、けふは人の上、あすは我が身の上、皆かくこそ候はめ。君こそ御心弱く渡らせ給ひ候とも、人々それよきやうに申させ給ひ候へや。とぞ申しける。武藏坊これを聞きて申しけるは、弓矢取る者のことばは綸言におなじ。言葉に出しつることをひるがへすことは候はじ。たゞ心やすく御暇を賜はりたし。とぞ申しける。判官暫く物をも仰せられざりけるが、稍ありて、惜しむともかなふまじ。さらば心にまかせよ。とぞ仰せられける。忠信承りてうれしく思ひて、たゞ一人吉野の奥にぞ留りける。されば夕には月星の光を戴き、朝には教訓の霧をはらひ、玄冬素雪の冬の夜も、九夏三伏の夏のあしたにも、日夜朝暮片時もはなれ奉らず仕へ奉りし御主の御名残も、今ばかりなりければ、日ごろは坂上の田村鷹、藤原の利仁にも劣らじと思ひしが、さすがに今は心細くぞ思ひける。十六人の人々も、面々に暇乞して、前後不覺になりにつけり。又判官、忠信を近く召して、太刀と

玄冬素雪  
九夏三伏

(一)桓武天皇の朝の武將。弘仁二年(一四七)至四年(一四九)歿。年五十四。  
(二)醍醐天皇時代の武將。下野高座山の賊を討ち功あり。

(一)同國伊達郡に嫁したる娘。

鎧とを賜ひ、故郷に思ひおくことはなきか。と仰せられければ、我も人も衆生界の習にて、などか故郷のことを思はざらん。國を出てし時、三歳になり候を一人とゞめ置きて候ひしぞ。彼の者に心付きて、父は何處にやらんと尋ね候べきなれば、聞かまほしく候。平泉出でし時、君ははや御立ち候ひしかば、鳥の啼きて通るやうに、信夫を打通り候ひしに、母の所に立寄り、暇乞ひ候ひしかば、齡衰へて、二人の子供の袖にすがりて、悲しみ候ひし事、今のやうに覺え候。老の末になりて我ばかり物を思ふ、子供に縁のなき身なりけり。信夫の庄司に過別れ、また、近付きて不便にあたられし伊達の娘にも過別れ、一方ならぬ歎なれども、わ殿ばらを成人せさせて、一所にこそなけれど、國の内にと思へば、たのもしくこそ思ひつるに、秀衡何と思し召し候やらん、二人の子供をみな御供せさせ給へば、一旦の恨はさる事なれども、子供を成人せさせて、人數に思はれ奉るこ

血をあへす

(壽永三年のこと)

そうれしけれ。隙なく合戦にあふとも、臆病のふるまひして、父の屍に血をあへし給ふなよ。高名して、四國西國のはてにおはすとも、一年二年に、一度も命のあらん程は下りて見もし見えられよ。一人とどまりて一人たえたるだに悲しきに、二人ながら遙々と別れては如何せん。とて、聲も惜しまず泣き候ひしを振捨てて、「さ承り候。」とばかり申して、打出で候よりこの方、三四年終におとづれも仕らず。去年の春の比わざと人を下して、「繼信討たれ候ひぬ。」と告げて候ひしかば、身も絶えなんと悲しみ候ひけるが、「繼信が事はさて力及ばず、明年春の頃にもなりなば、忠信が下らんといふうれしさよ。はや今年の月日も過ぎよかし。」などと待候なるに、君の御下り候はば、母にてさぶらふ者急ぎ平泉へ参り、「忠信はいづくに候ぞ。」と申さば、繼信は屋島、忠信は吉野にて討たれけりと承りて、いかばかり歎き候はんずらん。それこそ罪深く覺えて候へ。君の御下り候うて、御心安く

わたらせおはしましたし候はば、繼信、忠信が孝養は候はずとも、母一人不便の仰にこそ預り度候へ。」と申しもはてず、袖を顔に押當てて泣きければ、判官も涙を流し給ふ。十六人の人々も、皆鎧の袖をぞ濡しける。

—義經記—

三〇 暁の誕生

島崎 藤村

東の空のほのくもと、  
この暁のさまを見て、  
汝が世は白みそめにけり、  
運命をいかに占はん。

ことにさやけき紅の  
やがて處女となるまでの  
ひかりを放つ(明星)や、  
汝が生先のしるべせよ。

朝風舞をまふごとく、  
遙かに雲の袖を吹き、

鶏は寢覺に驚きて、

まづ黎明を呼びにけり。

始めて朝の床の上に、  
蕾を破るあけぼのの、

汝が初聲を聞く時は、  
蓮の花にまがふかな。

ぬるき潮に浴して、  
まだ罪もなき姿こそ、

朝日にほふ蒔漆、  
なかばは夢の風情なれ。

いかにいかなる世なりとは、思ふ心もなからまし。  
そのうるはしき眼もて、 なにをか見んと願ふらん。

まだ生まれ來し世の中に、願ふもとめもなからまし。  
空に優しき手をのべて、 なにをか早も慕ふらん。

行く末花と生ひたちて、 いかなる夢を重ねとも  
かゝるゆたけき朝のごと、心の空のしづかなれ。

—藤村詩集—

### 三一 文化生活の出発點

三宅 雪嶺

文化生活の出発點は、眞善美を指して進まうと心掛けるところにある。眞と善と美と三つ組を形作り、各獨立しながら相接觸して、よくこれを調諧均齊し、少しも矛盾せぬやうにするのが完全な生活である。

眞善美は果して完全な要諦であるか。いかにしてこれを證明するかといふに、これは人類が幾代となく經驗を積み知識を練つて、おのづと知りえたのであつて、今は誰でも熟知してゐる。眞善美と

調諧均齊

## 達德

いふ名稱はギリシヤ人の創唱だといふが、ギリシヤばかりが發明の榮譽を荷なふわけにはいかぬ。同様のことは何處にもあるもので、言葉に現さぬにしても、事實には現してゐる。日本の三種の神器は特にこれに眞善美を配當したのではないが、自ら相當するところがある。即ち鏡は眞、劔は善、玉は美を現す。鏡が物そのものをありのままに映じ、眼を眼とし、耳を耳として、少しの間違をも許さぬのは眞を意味する。劔が、或は殺人劔といひ、或は活人劔といつて、悪人を除き善人を救ふのは善を意味する。玉が何等の必要もないやうで、しかも見て飽くことのないのは美を意味する。支那で智仁勇を達徳とし、日本で智を鏡に當て、仁を玉に當て、勇を劔に當てたことがある。普通に世間で眞善美と分けず、又これを意識せぬやうでも、一たび聞けば、何人もこれを了解するのは、人の頭脳がかう出來上つてゐるからである。

## 偶發

眞善美の語の起源は數千年前にある。そこで随分舊いものとして、今日これを差措いて願ぬものが少くない。科學者は實驗に照らして眞實を知らうとし、他に何事があつても振返つて見ず、偶、振返れば輕蔑の目を以て見る。宗教家や道德家は、昔から善惡正邪と定まつたところから見て、過去の形式に當てはまらねば、人間扱にすべきでないやうに心得てゐる。藝術に従事する者は、眞といひ、善といひ、勝手に取極めたことであつて、身を窮屈にするよりも、美に憧れ美的生活を送る方が生きがひがあると稱する。これは時代により土地によつて相違があるけれど、古來幾度繰返されてゐるか知れぬ。繰返される中に多少進歩はするものの、一部を固執して他を慮らねば、己自らを不具にする嫌がある。遺傳又は偶發で不具になることもあるが、多數は身體的にも、精神的にも、立派に發育する可能性を備へてゐる。それが周圍の事情で不具になり、恰も盲と啞と

伍伴



ヘレン・ケラー

臂が互に相罵るやうな滑稽を演ずるのは、深く戒むべきことでは  
 ないか、社會が進むとともに分業も亦進み、何でも専門に分れる以  
 上、互に相分れるのが進歩だと考へるのは、耳を破つて目の見える  
 やうにし、目を潰して耳の聞え  
 るやうにしようとするのに似  
 てる。聾で繪畫に長ずるのが  
 あり、盲で音樂に長ずるのがあ  
 るけれども、それで畫家が聾に  
 ならねばならぬといふことが  
 なく、音樂家が盲にならねばな  
 らぬわけもない。ヘレン・ケラー  
 が盲啞で人並以上の能力があるからとて、人々が盲啞にならうと  
 すれば、全く瘋癲の伍伴に入る。眞善美が別々にあるべきものでな

いことは、五官の別々にあるべきでないと同様である。但し、人によ  
 つて、三つが同じやうには備らず、厚薄の別のあるのは免れぬ。  
 眞善美を揃へて進むのは、文化生活に大切なことで、食物でも、衣  
 服でも、家屋でも、公共生活でも、成るべく三拍子揃はせたいもので  
 ある。然らば食物に何の眞善美があるかといふに、生理的、衛生的に  
 法則を守るのは眞を求めるのである。しかし、單にそれだけでは濟  
 まぬ。肉類をとるにも、慘酷な方法を用ひて捕へまいとする。これは  
 善を求めるのである。また食物は料理して美味を増すばかりでな  
 く、體裁も餘り見苦しくはならぬ。これは美を求めるのである。そ  
 して眞は善美を助け、善は眞美を助け、美は眞善を助け、互に相助長  
 するところがある。衣服や家屋についても同様である。堅實も質素  
 も結構である。しかし、一概に華美を排斥すべきでない。たゞ堅實質  
 素と撞着せぬ範圍に於てすべきである。

一隻眼

荻野獨園が弟子に謂つた、釋迦は今正に兜率トウソツ天テンで頻りに勉強して居られる。我等は何として勉強せずに居られようぞ。と普通ならば、釋迦は理想に達し進歩を極めたところを、獨園はそれと違ひ、釋迦も現に勉強して居るとした。そこに一隻眼があると認められる。長い間には進歩があり、停滯があり、退歩もあるが、大體に於て、人生は進歩を続け、いつまでも進歩の途にある。正しく、清く、麗しく、慈みのある生活を送らうと思ひ立つのが文化生活に入る第一歩である。そして、いやが上にも充實し、發展し、完全に達し、圓滿に到らうと絶えず進むところに、人生の實相が現れる。眞善美を指して進めば、いつ死んでも、それだけ適當に生活し得たのである。

自修文

### 三二 文化と婦人

生 方敏 郎

人間の幸福は、歴史にその名を謳ウタはれざる人々に依つて保た

(1) Prometheus.  
ギリシヤ神話にある神の名。ゼウスに反抗して天から火を盗んで人類に與へ、以て人類に火を教へた。傳へられ  
青史にその名を垂れる  
 歴史にその名を垂れる  
 と竹の札に書  
 いたのだといふ

れ進められた。家といふものを工夫した人、柱を立てた人、屋根といふものを考へ出した人、壁といふものを考へ出した人、それは誰々だつたか、人名辭書にはない。木棉を植ゑて綿を採りはじめた人、それを絲に紡いだ人、それを織つて布にした人、着物をこしらへた人、それも人名辭書にはない。鹽で食物に味をつけることに思ひついた人、梅の實から得た酢や蜂の蜜に含まれる甘味を利用して食物を調理しはじめた人、それも歴史家からは書洩らされてゐる。火を始めて用ひた人、それはギリシヤではプロメシウスが人間を愛する心から、天上の火を盗んで来て人間界に與へた、その爲に彼は残酷な刑罰を受けたと傳へられてゐる。それは勿論神話に過ぎぬが、しかし人間を禽獸の境から救ひ上げた者は、火を用ひはじめた人や、家を作りはじめた人だ。綿や織物を作りはじめた人々だ。食物の調理をはじめた人々だ。決して〳〵青史にその名を垂れてゐるえらい人々ではない。



法燈云々

のりのもし  
び、即ち佛  
が、ことである  
衣食住を最も  
大切に見てもし  
れを今まで、そ  
ふ、や、さ、ず、傳、へ、て、  
來、た、の、を、い、

聖火

きよらかな尊  
い、明、火、即、ち、文、  
明、の、を、

人間を禽獸の生活から救ひ上げた無名の人々は、これ等人間の救済者等は、果して男性であつたか、それとも女性であつたか、いづれとも定むべき確乎たる證據はない。しかし現代まで數萬年若しくは數千年の間、衣食住の法燈に油をさし、文明の聖火をともし續けて來た人々は、私の見るところ無名の女性である。女性の自ら職分と思つてやつて來た勞役は、何と尊いものではないか。

衣食住の道は念佛よりも遙かに尊い。着物を縫ひ、食物を調理し、住居を掃除することは、天國を説く御教よりも價値がある。人がそれに想ひ到らないのは、その有難味に馴過ぎた結果だ。宗教の説く天國には餅菓子の味があり、衣食住の務には米の飯の味がある。彼は文にしてこれは質である。天國に到るの教は花で、生活の勞苦は實である。

婦人は緋の法衣は着なかつた。婦人は金襴の袈裟はかけなかつた。

鴻儒

大學者。

(一)程頤のこと。

世に伊川先生

元といふ。大觀

七年(一一七六

十五年)歿。年七

十五。

酒掃應待云

はきさうぢや

客の應待から

始めて次第に

君子にまでな

る。

支那二十四

朝

支那は昔から

朝廷のかはつ

たこと今の中

華民國に至

るまですべて

交渉もない

關係もない。

つた。婦人はお勝手でぬか味噌をかき廻し、汚物の洗濯をするこ

とに依つて、よく人類の生存を永續させた。

宋の鴻儒程伊川が「酒掃應待より以て君子に到るべし」との言

葉には、味はふべき深い意義が含蓄されてゐる。さうだ。朝晩の座

敷のお掃除や、お早うございます。今晩は。の應待こそ君子の道

である。酒掃應待を修めて君子に到ると言ふよりは、酒掃應待の

中に仁義あり禮智あると言つた方が適當なくらゐである。

昔から男は屢、政治的革命をした。その爲に血を流し、屍を積ん

だ。しかし政治的革命的の如きは、その功はよくその罪を償ふに足

るや否やは疑問である。支那二十四朝の革命の如き、そのすべて

が殆ど無益の流血に過ぎなかつた。狼の首を切つて虎の首を繼

代へたに過ぎなかつた。そんな事は、人間の生活史には殆ど何の

交渉もない。平氏倒れて源氏起り、源氏亡びて北條氏紹ぎ、新田氏

興り足利氏代り、織田、豊臣、徳川氏交替しても、それは單に政權の

見世物云々  
御から見て居  
つたら面白  
い見物も知れ  
ぬが、それに  
焼いたりなど  
して、残念な  
ことに、高木  
戸銭が餘り高  
過ぎる。

英雄的。勇者  
(Heroic)

雄辯に語ら  
れる  
ですぐれた辯舌  
で十分に語ら  
れて居る、即  
ち事實は明らか  
に證明して居る。

争奪、野心と虚榮心を作意とした悲喜劇だけのものであつて、側から見物したら多少の興味はあるかも知れないが、その爲に家を焼き人を殺し、寶を散じ書を失ひ、世を暗黒にしたことを思へば、見世物として餘りに高價な憾がある。

女の成就した革命はそんなものではない。穴居から藁小屋へ、藁小屋から立派な家へ、木綿から絹物へ、そして百花爛漫たる現代の美しい織物は、皆女性の華美を好むところから發明されたのだ。女性の成就した革命は、流血のそれではない。ヒロイックでもなければ、ロマンチックでもない。歴史家はこれを書洩らした。しかし二千年前の人間の生活と、現代の人間の生活と較べたら、無名の婦人の成遂げた革命の結果は、雄辯に語られてゐる。

それ等生活の革命には、無名な男性の手に依つてなされた部分も可なりあるだらう。友禪も男性が發明した。しかしそれは婦人がよく友禪を嗜好したからこそ、益、發達して現代のところま

で進んだのだ。若し婦人があの模様を嫌つたであらうならば、そして男性の多くのやうに、酒や戦争ばかり好んでゐたであらうならば、友禪はとうの昔に滅びてゐた。否發明さへもされなかつたであらう。

我々はまだ、西洋を師として學ばねばならないが、別けても學ぶべきは、衣食住生活の方法だ。私がイギリスやフランスやアメリカやドイツを尊敬する所以のものは、地圖の色別が大きいからではない。彼等が外交がうまいからではない。彼等が軍備が充實してゐるが爲ではない。否私が彼等を尊敬するのは、彼等は樂に働いて澤山仕事をし、うまい物を食べ、丈夫な衣服を着、世話のかゝらない家に棲んで、しかも割合に安價に生活する點に在る。

彼等西洋人は良い道具を使ひ、上手に仕事をしてゐる。日本婦人が朝から晩まで仕事に追はれ、讀書する暇も散歩する時間も

地圖の色別  
云々  
領土のひろい  
こと。

綽々  
ゆつたりとし  
てせまらな  
いさま。

小人閑居し  
て不善を爲  
す  
修養の出来て  
居ない者は、  
ひまで居ると  
善くない事を  
する。

持たない時に、西洋婦人は綽々として餘裕のある生活を營んでゐる。何しろ日本婦人には、暇を作り出すことが、目下の最大急務である。

昔は小人閑居して不善を爲すと言つた。暇があるところくなこととはないと考へた。昔はさうでもあつたらう。しかし現代の婦人には殊に用が多過ぎる。一つでも手を省くやうにしないでは、修養も出来るものではなく、生きがひもあるものではない。閑暇を得ること、それが本當に婦人の解放である。— 女性に支配する—

### 三三 春と人

上 田 敏

生命の中流に棹さして十分に世の苦樂を味はひ、自己の意識を強めようとする者は、草木の角ぐみ渡る春の日を浴びて、失はれた力のとみに復歸するを感じ、新しい熱意を以て諸の印象を迎へる。

### 春愁

### 因襲



上 田 敏

郊外にも、都會にも、自然の風色に、人事の活動に、春光と生氣が漲り渡るのだから、彼岸から八重までの櫻時ばかりでなく、木瓜も、海棠も、薔薇も、堇も、蓮華、蒲公英も、垣根の若葉も、鳥の聲もこまやかに懐かしく、しとくと降る春の雨、花見歸の土手のうへ上潮とともに春愁をもたらす夕暮の風、さまざまな夢思はせる靜寂な池の汀に菖蒲咲く頃も過ぎて、瑠璃色めいた碧空に、白い雲がふわ／＼と動いて行く春と夏の界までも、すべての景物は多感な人に迫つて来て、快くも亂心地あらしめる。世人動もすれば因襲に囚はれて、陸月、衣更着、彌生の三月を春とし、櫻花の散るのを見て季すでに過ぎたとする者もあるが、それは眞に春の心を解したものの

でない。春は浅いもよく、盛もよく、閑なるもよい。

春はたゞ人の心を浮立たせて、氣輕な戯に赴かしめるのではない。この時うるはしい萬物は、生の惱を感じて、精力の横溢に壓迫される。そこに創作の苦痛がある。芽ばへ花咲くことは一種の緩和であつて、言はば重荷を下した時の安心に過ぎぬ。さればこの春色に對する人間の心も、萬物の活動に同情し共鳴して、ここに平行した變化を感じ、偉大にして深沈たる大自然の節奏に合するのである。若し花を看てたゞ單純な官能の快感を貪るのみならば、同じ色の造花を見てもよい筈であるが、天然の千紫萬紅には、それ以上の深い意味が自ら籠つて居て、思邪なき靜觀の人心に通ずる。舊くしてしかも常に新しい春のめぐり來て、吾等の今更に胸さわぎするのは、この大自然の脈搏を感じるからである。爽快な夏も面白く、靜閑にして豊かな秋も楽しく、寂としてまた自ら人に勇あらしめる冬も

官能

靜觀

佳いが、自然の胸を抱く春の心は、年ごとに變りなく切である。

誰いひそめた言葉であらうか、イタリーの古歌に、春は一年の若き時、若き時は一生の春」とある。春を愛するは若きを愛するのだ。春を惜しむのは青年の去易きを惜しむのだ。生と死と美と悦と愁と愛を歌ふ古今の抒情詩には、老と若さの對照がいつも伴奏をつけて居る。あゝ少年にして智あらば、老年にして力あらばと、折返し折返し歌ひ續ける古の智慧を聽くごとに、春と少年のあわたゞしく過行くのが惜しくて堪らぬ。けふをつかめ」とローマの詩人は教へ、「手折れよ薔薇を、花咲くひまに。けふがあすある世でもなし。」とドイツの詩にもいふ。この一見していかにも無分別な量見は、尋常の道學者や、考もなく口先でこれに雷同する俗流の思ふ程しかく思慮のない説ではない。智と力といづれか尊い。よしや智淺くとも、生命の水は汲みえられる。力なくては泉の傍へも近よれまい。初は淺か

老來

つた智も、苦樂の經驗に依つて、終に自らを深くする例はあるが、年少にしてその世の春にふさはしい思と行がなく、徒に老成を期して空しく貴重な光陰を費すのは、怯に非ずんば鈍である。この類の人、偶、老來こし方を顧て一代の好機會を逸したのを悔む時、口にこそ出さないが、さぞ心中の残念はつらいことであらう。

交感す

春の光の波に浮んで、暢やかに朗かに生を樂しめ、時が食みへらす人間の力も、萬物の復活に交感して補はれて行く。しかもまた春の樂みには、愁もある、悦もある、惱もあつて、それが吾等の生活力を刺戟し、促進する。かくて晩春の候、膚滑に筋も弛んで、やゝ倦怠を感じるのは、勢力過剩の爲であらうか、續いて來る夏秋の努力に具へる準備とも思へる。年ごとの春の光を身に浴びて、心の奥まで浸つて居れば、老はおのづと退散する。人若し熱情を以て春を追求したなら、その追求の間に自然と力は加り、老は堰きとめられよう。

(1) St. Gothard.  
スキス中央部に連るアルプス山脈のトンネル。長さ九哩餘。  
(2) Airolo.  
聖ゴタールの南口。

春の恵を輕んずるのは大の量見違である。天の與ふるを取らないと罰が當る。尤も一年中の氣候が餘り温暖であつて、凜烈な冬の寒氣と寂莫を痛切に感じない時は、勿體なくも春の有難味を忘れ易くなる場合がある。例へば、日本の太平洋岸、殊に東海道及びそれより西南部に住まふ人々の中には、また春が來たかぐらゐの微温な感じを抱く者もあらう。しかしそれでは實にせつかくの楽しい世界を自分で狭くするのである。對照は眞に物の味を強めるもので、白雪の冬よりして直ちに陽春の盛光に接すると、眼も眩むばかりの美に打たれることがある。往年私は歐洲觀光の途すがら、スピスから嶺南清明の天地に移らうとした時、聖ゴタールのトンネルに入る前までは連山湖面悉く飛雪に蔽はれて、冷たい白い夢の中を通る心持であつたが、汽車が暫く暗黒道を過ぎて、忽ち青天の白光に接するや、思はず聲を揚げて南歐の讚美を唱へた。(1)

いふ里にかゝつた頃、南の方遙かにイタリーの平原が黄金の光に浮んで、などのわたりかと思ふばかりなのを望んだ時、つくづく春の徳を思つた。

若い美しい娘が餘りに手を大事にして居るのを見て、或人がどうせ終には萎びてしまふ手ではないかと、たしなめるつもりで言つた時、或夫人は口を挿んでいつた、しかし今はまだ萎びてゐない」と。人生に對する最も賢明な態度は、この一言に含まれて居る。楽しい日に樂しめ、悲しみたければ悲しい日が來てからにするがよい。その時も若し出來るなら、自分の悲みをもつて近くの人々に氣持わるがらせずに濟ませたいものだ。傳道の士が言つた如く、すべてに時がある。播く時もある。収穫の時もある。樂しむ時もある。悲しむ時もある。そして春の日は樂しむ時である。躊躇なく、心配なく、取越苦勞なく、暢やかに、朗かに春の生を樂しめ。

— 思想問題 —

取越苦勞

### 三四 當今の憂

徳富蘇峰

日本帝國の運命は、たゞ日本の自力に據りて支持せられ、繼續せられ、開展せらる。吾人が自力主義を主張するは、畢竟我自ら我を恃むの外に、方便も手段もあらざればなり。即ち千百の方便手段ありとするも、それは自力主義踐行の後に於て、始めてその効用を見るべければなり。

然りと雖も、吾人がいはゆる自力主義は決して自滿主義にあらず。自足主義にあらず。何ぞ況や鎖國主義をや。排外主義をや。吾人は我が短を補ふべく、世界のすべての長を採らざるべからず。吾人は飽くまで籠城割據の風を破りて、世界と歩趨を一にせざるべからず。しかもこれたゞ内に自ら主持するところありて、而して後外に向つてこれを求むべきのみ。

自力主義  
我自ら我を  
恃む

歩趨を一に  
す

協調

吾人は我が國民が精神的に獨立し、而して後世界的に協調せんことを望む。精神的の獨立とは何ぞや。日本國民は日本國民として、その獨得の立脚地に於て、内外一切の經綸を定むることこれなり。東洋のドイツにあらず、東洋の英米にあらず、日本は即ち東洋の日本としてなり。日本の日本としてなり。即ち我自ら我が固有の歴史的系统に則り、我自ら我が國民的見地に據りて、その裁斷を下すにあるのみ。かくの如く内すてに主持するところあり、乃ち外に向つてその益を求む。必ずしも英米といはず、必ずしも獨佛といはず、世界の長は皆採つて以て我が有と爲すべし。復何をか顧慮し、何をか遲疑せん。

惰氣滿々  
小成に安んず

惟ふに我が國當今の憂は、第一、國民の惰氣滿々たるにあり。別言すれば、國民猛志を消磨し、小成に安んずるにあり。曰く、日本はすでに五大國の一に位せり。曰く、日本はすでに東洋の盟主たり。曰く、日

磨勵自彊

Wilson.

危殆

本はすでに富強なりと。而して更に磨勵自彊、この國運を進一轉せしむるを閑却しつゝあるなり。第二は、世界の夫勢を根本的に謬解せるにあり。曰く、世界は泰平なり、今後は戦争らしき戦争は絶無なるべし。國際的の葛藤は國際聯盟の爲に自動的に按排せらるべし。彼等は待つあるを待まず。その來るなきを待み、その待むべきを待まず。待むべからざるを待むなり。吾人は今その妄想たることを説破するまでもなく、ここに英國現在の參謀總長、ウィルソン元帥の言を引證すべし。曰く、吾人が大戰最中に於て屢、耳にしたる『今次の戦争は、爾後の戰禍を杜絶するの戦争なり。將來はたゞ平和あるのみ。』との言は、畢竟人を瞞着したる妄言にてありき。看よ、現在に於ても、世界の各所に二十乃至三十の戦争行はれつゝあるにあらずや。果して然らば、吾人は今後の戦争に向つて、大いに準備するところなかるべからず。我が帝國の前途は實に危殆なり、不安心なり。』と。

闡明す  
苟安を偷取す

これ英人に與へたる訓戒なれども、採つて以て我が訓戒となすに足らざらんや。第三、我が日本帝國は世界に孤立せり。孤立といはんよりも、寧ろ世界の多くのものより排斥せられつゝあるなり。これ必ずしも日本國民の罪とのみいふべからず。しかもその原因は何處にあるにせよ、事實は正しくかくの如し。而して我が國民は、かくの如き不愉快なる事實を正視し、識認し、これに處する所以の道を講ぜざるは何ぞや。第四、我が國民は物質的に驕慢となり、精神的に萎縮せり。退いて自力の足らざるを慚ぢ、自國の缺陷を補ふことに努めず。進んで世界に向つて自國の真相を闡明し、世界の誤解を正すことに努めず。たゞその日暮しに一時の苟安を偷取しつゝあるは何ぞや。第五、一寸の蟲にも五分の魂あり。いかに世の迫害を被るとも、我が國民にして自ら道義的大自信あらば何をか懼れ、何をか憚らんや。今日の憂は、日本帝國が世界的迫害の中心たるにあらず

角逐す

眼前を糊塗す

して、日本國民の道義的自信力の失墜にあり。

蓋し吾人が自力主義といふものは、内に國民の道義的自信力を扶植し、まづ自ら不敗の地を占め、而して後徐に外に向つて我が志を行ふにあるのみ。かくの如くして世界と協調を保つべく、かくの如くして東洋の盟主たるべく、かくの如くしてアングロ・サクソン民族と角逐して、世界の文化に貢獻し、我が大和民族の天職を全うするを得べきのみ。今日の如く、我が國民自ら信ぜずして他を信じ、自ら頼まずして他を頼み、放恣怠慢、強ひて自ら欺きて眼前を糊塗し去らんとす。かくの如くして止むなくんば、我が帝國は精神的に死亡するなり。

——大戦後の世界と日本——



女子新國文 卷八 終

通用字及び正字對照表

(茲に其の主なるもののみを擧ぐ。本  
書には主として通用字を用ひたり。)

劍	剪	刃	函	減	涼	準	况	決	冒	免	免	佞	仍	兩	通用	
劍	剪	刃	函	減	涼	準	况	決	冒	免	免	佞	仍	兩	正	
寃	墻	塚	塲	噴	器	唇	叙	収	厨	厨	卿	鄉	即	効	通用	
寃	墻	塚	塲	噴	器	脣	叙	収	厨	厨	卿	鄉	即	効	正	
拔	拿	戲	戲	戲	慨	恒	往	稟	屏	并	帽	尅	寶	寇	通用	
拔	拿	戲	戲	戲	慨	恆	往	稟	屏	并	帽	尅	寶	寇	正	
濱	溫	冰	殲	欸	概	桿	晉	昂	既	整	擗	擗	擗	插	通用	
濱	溫	冰	殲	欸	概	杆	晉	昂	既	整	擗	擗	擗	插	正	
盃	鼓	痴	畧	留	畫	瑣	玄	猫	猪	猿	鎔	陰	潛	潤	通用	
杯	鼓	癡	略	留	畫	瑣	玄	貓	豬	猿	鎔	陰	潛	潤	正	
織	績	績	紀	穀	粘	籤	纂	節	竽	竊	秘	願	穎	研	通用	
織	績	績	紀	穀	黏	籤	纂	節	竽	竊	秘	願	穎	研	正	
剛	勅	冲	働	俟	京	亡	並	万	脉	聳	耻	羹	群	爵	繩	通用
剛	勅	冲	働	埃	京	亾	並	萬	脈	聳	恥	羹	羣	爵	繩	正
婚	姉	妍	妊	野	坂	嚙	叶	厨	莽	艷	館	舖	阜	致	腸	通用
婚	姉	妍	妊	埜	阪	嚙	叶	厨	莽	艷	館	舖	阜	致	腸	正
考	慙	富	忘	庵	嶋	峯	峩	岳	記	解	霸	褒	衛	蔭	萌	通用
考	慙	富	忘	菴	島	峰	峨	嶽	記	解	霸	褒	衛	蔭	萌	正
概	槁	楫	棕	基	案	柿	村	普	軟	贗	贊	象	讎	識	通用	
槩	槁	楫	棕	基	案	柿	村	普	軟	贗	贊	象	讎	識	正	
砧	睹	狸	貉	無	烟	汗	毘	朴	馱	隸	隙	間	鎖	隣	輒	通用
砧	睹	狸	貉	无	煙	汚	毗	樸	馱	隸	隙	間	鎖	鄰	輒	正
線	總	網	紕	糾	粽	筍	競	稿								通用
線	總	網	紕	糾	糉	笋	競	藁								正

附録

同字表 (いっしょにて)



卻 シロ、隙。  
卻 シロ、隙。  
卻 シロ、隙。

鍛 キタフ。「鍛錬」  
鍛 キタフ。「鍛錬」  
鍛 キタフ。「鍛錬」

宛 字 (左の如き字は假名を  
使用するをよしとす)

おぼつかなし 覺束なし  
かひ (證の意) 甲斐  
きつと 屹度  
さすが 流石、追  
しまふ 仕舞ふ  
せつかく 折角  
だけ 丈  
だめ 駄目  
ちやうど 丁度  
ちよつと 一寸、鳥渡

附 録 終

でたらめ 出鱈目  
とうく 到頭  
とかく 兎角、左右  
とて、とても 迎  
とにかく 兎に角  
なかく 中々、却々  
ふるまひ 振舞  
はかなし 果敢なし  
ほんたう 本當  
むだ 無駄  
むづかし 六ヶし  
やたら 矢鱈  
やはり 矢張

秋山製

大正十二年十二月十日印  
大正十二年十二月十三日發  
大正十二年十二月十二日訂正再版印刷  
大正十二年十二月十五日訂正再版發行

女子新國文典附

價 定	
自卷一各金四拾貳錢	昭臨
自卷四各金四拾貳錢	和時
自卷五各金四拾錢	三時
自卷八各金四拾錢	年定
自卷九各金四拾壹錢	度價
自卷一各金七拾錢	昭臨
自卷四各金七拾錢	和時
自卷五各金六拾六錢	三時
自卷八各金六拾六錢	年定
自卷九各金六拾八錢	度價

著 者 芳 賀 矢 一

發 行 兼 會 社 富 山 房

代 表 者 坂 本 嘉 治 馬

東京市神田區通神保町九番地

富山房印刷所



發 行 所

東京市神田區  
通神保町九番地

合 資 會 社

富 山 房

電話神田二四二、二四三、二四四番  
振替口座東京五〇一一番

高  
女  
三  
年

広島大学図書

2000302220

